令和５年度

新時代に対応した高等学校改革推進事業
（普通科改革支援事業）

研究実施報告書

北九州市立高等学校
北九州市教育委員会

【表紙画像：令和６年度入学生の募集ポスター（部分）】

目　次

はじめに

１　背景と目的
（１）北九州市立高等学校の現状と課題　1
（２）国の普通科改革を踏まえた学科再編への動き　1
（３）新学科の目標・目的　2

２　令和５年度事業の取組
（１）「せっかくやるのなら・・・」　―　学校と教職員の意識の変化
ア　「新しい学び（カリキュラム）を創る」＜「新しい学校を創る」　4
（ア）新たなことに果敢にチャレンジする「事業企画室」を校務分掌に新設　5
（イ）様々なチャネルを活用したＰＲ活動
（ウ）これまでにない学校案内（パンフレット）にチャレンジ　6
（エ）新しい学校をコンセプトに、新たなロゴづくりにチャレンジ　9
（オ）教職員ポロシャツづくりにチャレンジ　10
（カ）生徒による体育祭Ｔシャツづくりにチャレンジ
（キ）プロモーションビデオ「学校の色を決めるのはキミだ！」製作にチャレンジ　12
（ク）保護者向けの説明会「歓迎！ナイトスクール」開催にチャレンジ　13

（２）外部と一緒に考える・取り組む
ア　文科省事業における実施体制（教育委員会・本校）　16
イ　コーディネーターの配置及び活用内容　17
ウ　市高魅力化コンソーシアム　18
エ　北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会　19

（３）様々な分野の方々との出会いがあふれる学校へ
ア　学校内外での大学生との活動　20
イ　大学生インターンシップの受入れ　21
ウ　大学との連携
（ア）九州工業大学と連携したアントレプレナーシップ教育　22
（イ）九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学及び西日本工業大学との連携協定締結　23
エ　他校の生徒との交流　25
オ　企業等との連携
（ア）日本ＩＢＭ株式会社との取組　26
（イ）福岡県中小企業家同友会との取組　27

（４）「高校魅力化評価システム」から見えてきた変化
ア　生徒編　28
イ　教職員編

（５）学校の教育理念の柱をつくる
ア　スクール・ミッション　30
イ　スクール・ポリシー　31

（６）高校入試改革
ア　インターネット出願方式の導入　33
イ　コミュニケーション力を重視した選抜制度の検討・導入　34
ウ　志願倍率の変化　36
エ　合格内定者・合格者を集めた「ファーストコンタクト」を実施

（７）令和６年度からのカリキュラム案
ア　「カリキュラム検討委員会」
（ア）カリキュラムの試行実施・改善　38
（イ）新たな学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」に係る単位数の再検討　39
（ウ）定期的なカリキュラム検討
（エ）コーディネーター（ＣＮ）及び外部有識者等との連携強化　40
（オ）学生インターンと協働したカリキュラム検討
（カ）先進事例の視察とその活用
（キ）探究的な学びづくりのための教職員の実践　41
（ク）客観的評価に基づくカリキュラム改善

３　令和６年度の展望　42

●参考資料●

参考資料１　保護者向け説明会「歓迎！ナイトスクール」資料　44

参考資料２　保護者向け説明会「歓迎！ナイトスクール」保護者アンケート結果　71

参考資料３　令和５年度　市高魅力化コンソーシアム　議事概要　82

参考資料４　令和５年度　北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会議事概要　88

参考資料５　「インタビューシップ」資料　92

参考資料６　高校魅力化評価システム（北九州市立高等学校：令和５年度）　114

参考資料７　「リーダーシップ研修」資料　123

1 背景と目的

（１）北九州市立高等学校の現状と課題

北九州市立高等学校（以下「本校」という。）は、北九州市内のみならず、福岡県全域から受検可能であるが、近年 15 歳以下の人口が減少していることもあり、過去５年間の平均志願倍率は 1.08 倍で、倍率が 0.87 となった年もある。

本校は部活動が大変盛んで、九州大会や全国大会に出場する部活動もあり、常に地域の注目を浴びている。そのため、部活動が主目的の志願者が大半を占めており、部活後・卒業後の展望を持てていない状態の生徒が少なからずいることも課題である。

また、市内唯一の市立高校であることから、人事が固定化しがちである。本校が中学校教員の異動先になっていることは、「中高連携」の一環としてプラスの側面がある一方で、中学校の延長化、「高校が中学校化」しているというマイナスの側面があることも否めない。

教職員は教育に対して非常に熱心であるが、市内の県立高校や高等教育機関などとの交流も少なく、「学校のことは学校の中だけでどうにかしなくてはならない」と、いわゆる「自前」で努力してきた経緯がある。

令和４年度に創立 60 周年を迎えたが、厳しい校則・校風が「古きよき伝統」として重んじられている学校でもある。歴史や伝統も大事にしつつも、生徒も教職員も安心して過ごすことができる学校づくり、時代の要請に応じた学びへの変化、探究学習などを通じて「コンピテンシー・ベースの学び」に転換していくことなどが本校の喫緊の課題となっていた。

【志願倍率の状況】

令和元年度	普通科　1.01	情報ビジネス科　0.80
令和２年度	普通科　1.40	情報ビジネス科　1.18
令和３年度	普通科　1.18	情報ビジネス科　1.13
令和４年度	普通科　1.29	情報ビジネス科　0.90
令和５年度	普通科　1.13	情報ビジネス科　1.11

（２）国の普通科改革を踏まえた学科再編への動き

本市では、産業構造や若年人口減などの社会情勢の変化などを踏まえ、令和元年度に有識者会議「北九州市後期中等教育に関する検討会議」を立ち上げ、北九州市立高等学校及び戸畑高等専修学校の在り方について協議を重ねてきた。

令和３年に、北九州市教育委員会では、検討会議での意見などを踏まえ、北九州市立高等学校については存続させるものの、地域の魅力を生かした特色ある教育内容の充実などの改革が急務であり、探究的な学習活動の充実や学科構成を変更（現行の普通科を「地域社会に関する学科」へ）することなどを決定した。

本校は、令和４年度に、文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定校となり、後段で詳述する外部有識者会議「市高魅力化コンソーシアム」及び「北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会」を立ち上げ、産・

官・学・民から構成される有識者等と対話しながら、本校の方向性について検討してきた。

変化が激しく、不確実性の高い時代にあって、様々な年齢・分野・立場の方々と対話・連携・協働しながら、共に未来を創造する学科を目指していくことを前面に押し出すことにより、旧来からの教育活動を見直し、授業研究、「指導者から支援者・伴走者へ」、そして生徒が主役の学校づくりにつなげていくことになった。

令和４年度末には、「北九州市立高等学校学則」を改正し、令和６年度入学生から現行の普通科を「地域社会に関する学科」に変更することを決定した。また、現在は普通科２クラス、情報ビジネス科３クラスとなっているが、令和６年度入学生からは情報ビジネス科を１クラス減らして、普通科を１クラス増やすことも決定した。

各設置者は、特色・魅力ある教育内容を表現する名称を学科名とすることができるが、様々な方々と対話・連携・協働しながら、共に未来を創造することを目指す学科であることを体現するため、新たな名称については「未来共創科」と改称することになった。

新学科の進行イメージは令和６年度から１学年ずつ移行していき、令和８年度に未来共創科の生徒が３年生まで揃い、進学実績が初めて出ることになる。

学科構成

	R４年度の学科		定員
普通科	１組	普通科	80人
	２組	普通科	
専門学科	１組	情報ビジネス科	120人
	２組	情報ビジネス科	
	３組	情報ビジネス科	

	R６年度からの学科		定員
普通科	１組	未来共創科	120人
	２組	未来共創科	
	３組	未来共創科	
専門学科	１組	情報ビジネス科	80人
	２組	情報ビジネス科	

進行イメージ

R５年度			
	1年生	2年生	3年生
1組	普通科	普通科	普通科
2組	普通科	普通科	普通科
3組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
4組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

R６年度			
	1年生	2年生	3年生
1組	新学科	普通科	普通科
2組	新学科	普通科	普通科
3組	新学科	情ビ科	情ビ科
4組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

R７年度			
	1年生	2年生	3年生
1組	新学科	新学科	普通科
2組	新学科	新学科	普通科
3組	新学科	新学科	情ビ科
4組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

R８年度			
	1年生	2年生	3年生
1組	新学科	新学科	新学科
2組	新学科	新学科	新学科
3組	新学科	新学科	新学科
4組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

初実績

（３）新学科の目標・目的

令和６年度からの新学科「未来共創科」には、これまでの「普通科」で実施してきた教育課程に加えて、北九州市立高等学校独自の設定教科「イチリツ・プロジェクト」（以下「イチプロ」という。）を新設する。必履修科目「総合的な探究の時間」（以下「総探」という。）と合わせて、６単位以上を取得できるように設定する。

「イチプロ」では、希望あふれる未来を地域の様々な仲間（産・官・学・民）と共に創る学びを通して、生徒のキャリア形成と進路選択（大学進学等）に生かしていけるものにする。

総探と「イチプロ」の学びの充実を契機として、教科学習においても探究的な活動を取り入れるなど、教科学習との接続、教科横断的な学びについても着実に取り組むことを目指し

ている。

「インプット」（情報・知識を取り込む）→「アウトプット」（活用・運用・表現）→「フィードバック」（評価、振り返り）の３ステップを何度も繰り返すことにより、新しい大学入試にも対応できる力を身に付けるとともに、社会人になっても役立つ「課題発見力」「表現力・説明力」などを育成する。

「未来共創科」では、定期的に学年・学校種を超える学びを取り入れるなど、枠にとらわれない学びのスタイルや横断型の授業・教育活動を柔軟に組み込んでいく。

令和４年度からは、外部との連携体制の構築等の役割を担うカリキュラム等コーディネーターを配置したり、教育委員会が北九州市立高等学校と市の関係機関とのつなぎ役になったりするなど、外部とスムーズにつながるための新たな体制も構築している。

令和５年度からは、北九州市立大学の大学生が週３回ほどインターンシップ生として教育活動の補助等に携わってくれており、生徒の身近なところによいロールモデルが日常的に居てくれることは、生徒のみならず、教職員にも大変よい刺激となっている。

また、本校は、昭和 38 年に北九州市立戸畑商業高等学校として発足しており、商業教育を礎とする学校である（平成 19 年に普通科を新たに設置した際に、北九州市立高等学校に改称した）。情報ビジネス科は、簿記会計能力、経済社会への理解力、事務処理能力、パソコンを使いこなす知識や技術などの修得を目指す学科である。

そのため、未来共創科での教育課程において、情報ビジネス科とのコラボレーションや、情報ビジネス科が従来から有するノウハウ（マーケティング、情報処理など）を存分に活用した教育活動を盛り込み、起業家マインドの育成につなげていきたい。

また、本校では、複数の企業で経営者として長年勤めた経歴を持つ民間人校長（令和４年 10 月からは副校長として、令和５年４月１日からは校長として配置）を採用している。

令和５年度からは、外部人材ならではの大胆な発想と幅広いネットワークを生かした教育活動（校長と生徒が市高の未来について考えるプログラムなど）に取り組んでおり、「普通教育を主とする学科」としてのカリキュラムに加えて、ビジネスの視点を盛り込んだ学びについても充実させていくことを目指している。

2　令和5年度事業の取組

（1）「せっかくやるのなら・・・」　―　学校と教職員の意識の変化

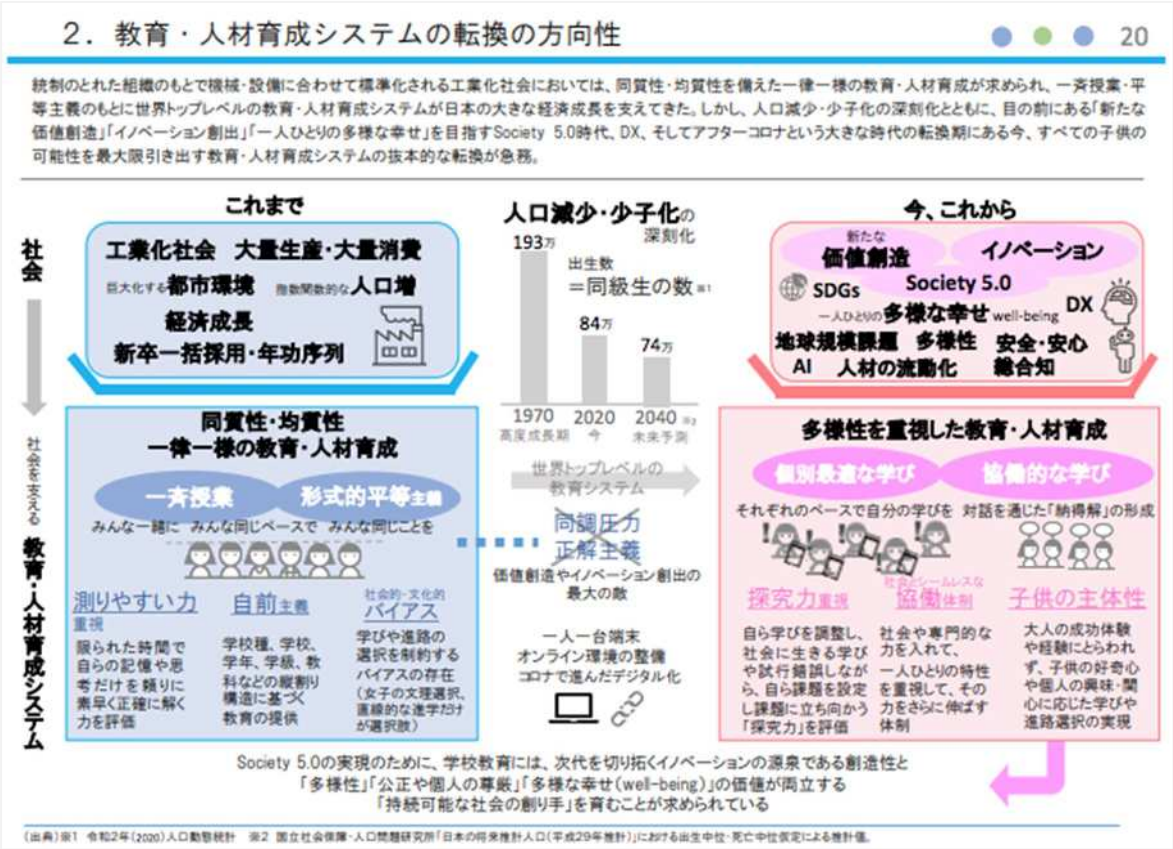
ア　「新しい学び（カリキュラム）を創る」＜「新しい学校を創る」

本校は、北九州市政の発足とともに、「北九州市立戸畑商業高等学校」の名称で設立され、令和４年度に創立 60 周年を迎えた。

戸畑商業高等学校では、昭和 44 年度に貿易科、昭和 48 年度に情報処理科、平成元年度に国際経済科を設置するなど、時代のニーズに合わせた学科再編やカリキュラムづくりを実践してきた経緯がある。

当時のような工業化社会、大量生産・大量消費の時代においては、教育分野においても同質性・均質性が重視されていたことなどから、学校の特色化や魅力化などにまで十分に着手できていなかったように思う。

しかし、「Society5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」にも示されたように、これからの社会では新たな価値創造、イノベーションが必要で、多様性を重視した教育・人材育成、個別最適な学びや協働的な学びを取り入れた教育が求められている。これらを踏まえると、単なるカリキュラムの改編だけでは不十分であり、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を本校の学びの中心軸に据える必要がある。



とはいえ、同質性・均質性を追求する教育を子どもの時分から経験してきて、そのような授業を長年にわたり実施してきた教職員にとっては、「個別最適な学び」や「協働的な学

び」の重要性は頭では理解できても、実際にどのように授業に生かしていけばよいのかなど、困惑することも多いのが実情である。

しかし、ＡＩの飛躍的進化やＤＸ推進等により、我々の生活自体が大きく変化しているにも関わらず、学校現場が多様性を重視した教育・人材育成に向けて少しずつしか変化していけないのであれば、その間に教育を受ける生徒にとっては不利益以外の何ものでもない。

つまり、「大人（教職員）が変われない」ことによって、生徒が社会から取り残されるリスクが高まるようなことが決してないように、教職員こそがしっかりと未来の社会を見据え、その未来の社会に向けて必要な教育を提供して生徒に伴走する必要がある。

そのためには、単にカリキュラムを改編するだけでなく、この学校の文化自体を変革しなければならないと考え、本校では、令和５年度の目標として

●未来を見据えてシフトしている学校づくり
●社会に触れる様々な機会
●新しいことへの果敢なチャレンジ

の３点を据えて、重点的に取り組んでいくことにした。

（ア）新たなことに果敢にチャレンジする「事業企画室」を校務分掌に新設

令和４年度までの校務分掌において、学校の広報業務を担う「広報」としていた部署を、令和５年度からは「事業企画室」という名称に変更した。

従来の「広報」の部署では、学校パンフレットやホームページの作成、中学生・保護者対象の学校見学会の実施、中学校への学校訪問、中学校進路説明会への参加などが主要業務に過ぎなかった。

しかし、企業でいうところの「顧客」（学校では「生徒」）に本校について深く知ってもらい、関心を持ってもらうことこそが、「広報」の要であり、本来の趣旨である。

そのため、これまでは単に「今あるものを広報すること」に主眼を置いていた業務を、「新たな魅力を企画し、広報して、仲間を増やすこと」に重点を置く方向にシフトし、名称も改めることにした。

（イ）様々なチャネルを活用したＰＲ活動

令和４年度末に北九州市立高等学校学則を改正し、令和５年度から新学科「未来共創科」に係る対外的な説明を開始した。本校の学科再編の背景、時代や社会の要請に応じて「学び」の概念や生徒が身に付けるべき資質・能力が変化していることのみならず、大学入試改革の状況などの情報も交えながら、様々なチャネルを活用してステークホルダー（中学校、中学生、保護者等）に対してアピールした。

これまでは「とりあえず情報を撒く。反応があれば対応する。」といった消極的な広報活動に留まっていたが、教職員が積極的にＰＲ活動に関わってくれた。

対外的なＰＲに当たり、教職員自身がそもそもこの学科再編を行う必要性は何か、な

ぜ学びを変化させなくてはならないのか、本校の特色や魅力とは何かについて改めて考える貴重な機会にもなった。

時期	場面・場所等	備考
令和５年２月	校長会長会議（オンライン）	新学科のＰＲ
５月	中学校長会議（オンライン）	新学科のＰＲ
	市立中学校全校訪問（第１回目）	教職員による新学科のＰＲ
	八幡東イオンモールにて PR 動画配信（５月～令和６年３月まで）	
６月	市立中学校全校訪問（第２回目）	パンフレット配付・説明 ※市外の中学校にも訪問
	中学校教頭会議（オンライン）	新学科のＰＲ
８月	教育委員会発行の情報誌「未来をひらく」	新学科のＰＲ
	「シン・イチリツ」PR 動画の製作・配信開始	
	保護者向け説明会「ナイトスクール」	初の保護者向け説明会（夜間に実施）。約 200 名が参加。
９月	第１回中学生学校見学会	約 600 名が参加（保護者約 250 名を含む。）。
10 月	第２回中学生学校見学会	約 300 名が参加（保護者約 110 名を含む。）。
	塾での新学科 PR	オンライン
11 月	入試要項配付（特色化選抜、Web 出願など）	全市立中学校
【その他】 ・中学校の要望に応じて中学生向け高校説明会に参加（随時実施。令和６年３月末時点でのべ 72 校で実施済み。）		

（ウ）これまでにない学校案内（パンフレット）にチャレンジ

「普通科から『未来共創科』に学科再編すると同時に、新たな学校を創るくらいの気持ちでやろう」とのコンセプトの下で学校案内（パンフレット）の検討を進めたが、事業企画室の教職員の間で「新たなものにチャレンジしたい」という気持ちの変化が生まれてきた。

新しいものを作るとなれば、一定の労力を要することになるが、新たなものを創る（生み出す）ことにチャレンジしたいという、従来とは異なるポジティブな雰囲気が教職員間に芽生えてきたのは管理職にとっても嬉しい驚きであった。

令和４年度　学校案内

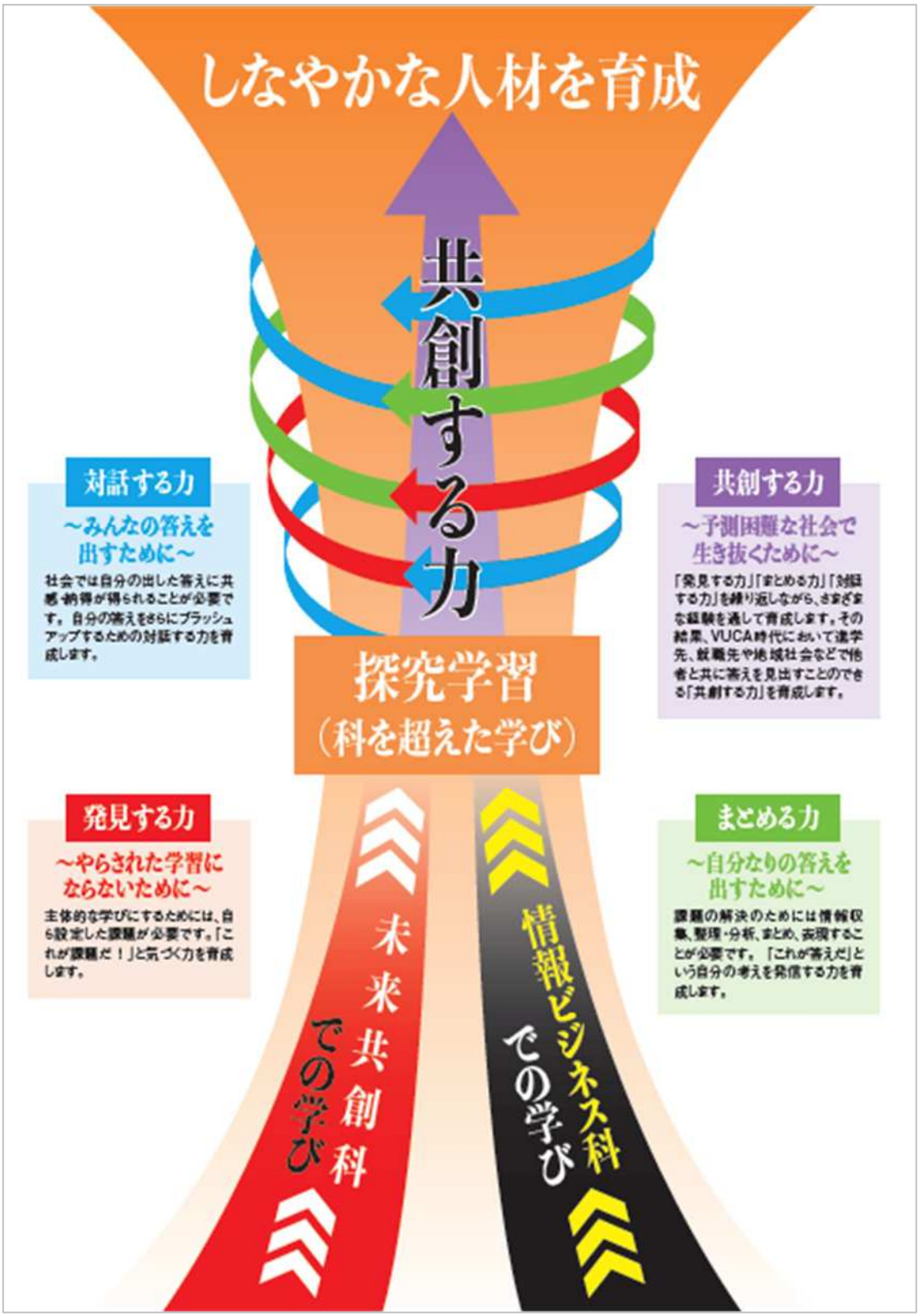
令和５年度　学校案内

令和６年度　学校案内

その結果、上図のように、従来の学校案内とは全く異なる、独創的かつ現代的なテイストに変化したり、左から開くと「未来共創科（前普通科）」の内容が、右から開くと「情報ビジネス科」の内容が始まるという、これまでにはないパンフレットの構成に変わったりした。

編集の過程において教職員間でよく聞こえていたのは、「こうしたら面白いんじゃない？」など、これまでに聞くことがほとんどなかった、チャレンジすることの楽しさを表すポジティブな言葉であった。

また、「本校でどのような学びを行っていくのかについても積極的に発信したいよね」などの声も上がり、本校の学びのイメージ作りにも教職員が熱心に取り組み、以下のような学びの概念図を作成してくれた（以下の図は、学校案内からの一部抜粋）。



（エ）新しい学校をコンセプトに、新たなロゴづくりにチャレンジ

事業企画室が中心になって、新しい学校のイメージアップと若い世代にも響く新たな学校ロゴを作ってみたいとの意欲が教職員間で高まり、自由な発想の下で新たな学校ロゴが完成した。

これらのロゴをイベントなどでも活用することで、「厳しくて固い昭和の学校」という本校のイメージからの脱却にも役立てることができた。

令和４年度までの学校ロゴ

北九州市立高等學校

●令和５年度に新たに追加した学校ロゴ
（シン・イチリツの「シン」（新）を、かつての流行語「おニュー」にかけたもの）

ONew
KITAKYUSHU City
High School

●多様性をイメージした学校ロゴを更に追加

ONew
KITAKYUSHU City
High School

このロゴの作成に当たっても、業者にデザインを依頼したわけではなく、教職員が半ば面白がって、ワクワクしながら作成していたのが印象的である。

このロゴが完成したことにより、思わぬ波及効果が生まれ、「教職員ポロシャツを作

ってみよう！」という想定外のチャレンジにもつながった。

（オ）教職員ポロシャツづくりにチャレンジ

１学期の終業式の日に管理職が着用し、新しい学校づくりというコンセプトとともに、学校長が生徒に紹介した。

教職員が着用することで、生徒にも「新たなことにチャレンジしている学校に在籍している」という感覚が芽生え、そこから「自分たちも何かにチャレンジしたい。」と思ってほしいと考えていたところ、生徒自身から「９月の体育祭用に自分たちもＴシャツを作りたい。」との声が上がってきた。

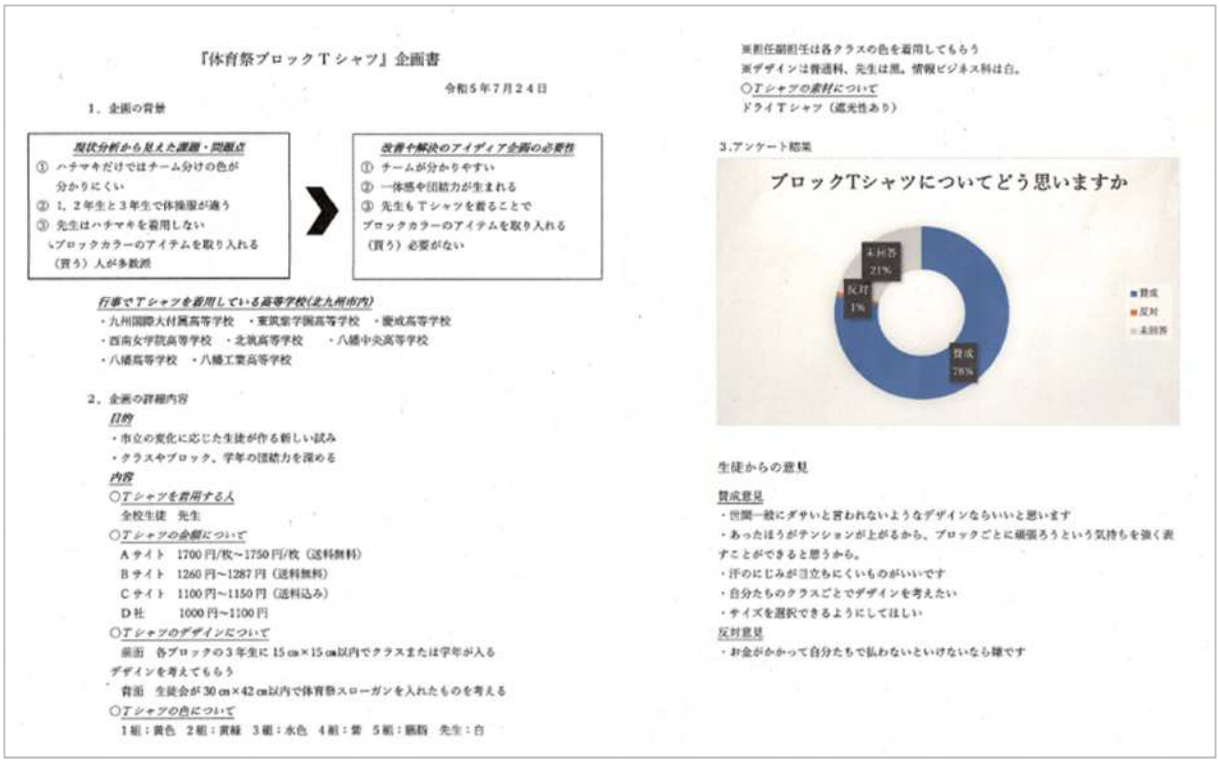
これまでは、「自分たちの希望を言ってもどうせ無理」といった消極的な姿勢が多かった生徒たちであったが、大人が面白がってこれまでになかった取組を実践している姿や、大人が楽しんで学校改革に取り組んでいる様子を日常的に目にすることによって、「私たちもこんなことをしてみたい。」といった提案や発言が生徒たちの間で少しずつ増えてきたのは嬉しい変化であった。

（カ）生徒による体育祭Ｔシャツづくりにチャレンジ

しかし、体育祭Ｔシャツを作ると言っても、当然のことながら一人当たりの費用負担が発生するわけで、全員が体育祭Ｔシャツを作成・購入するということは決して低いハードルではない。

そこで、生徒は「不可能を可能にするにはどうしたらよいか。自分たちでできることはないか。」と、他校の事例などを調べたりしていた。その結果、ＰＴＡにコンセプトをプレゼンテーションすることによって理解を得て、購入の支援をしてもらえないかと考え、ＰＴＡに自ら申し出を行い、Ｔシャツの作成・購入に係る支援の依頼にチャレンジすることとなった。

生徒たちが主体的に考え、互いに協力し合いながら、なぜＴシャツを作りたいのか、Ｔシャツを作ることでどのような効果につながるのか、デザインはどのように決めるのかなどをまとめた企画書を作成した（以下参照）。



『体育祭ブロックＴシャツ』企画書

令和５年７月２４日

１．企画の背景

現状分析から見えた課題・問題点

① ハチマキだけではチーム分けの色が分かりにくい
② １，２年生と３年生で体操服が違う
③ 先生はハチマキを着用しない
↳ブロックカラーのアイテムを取り入れる（買う）人が多数派

改善や解決のアイディア企画の必要性

① チームが分かりやすい
② 一体感や団結力が生まれる
③ 先生もＴシャツを着ることでブロックカラーのアイテムを取り入れる（買う）必要がない

行事でＴシャツを着用している高等学校（北九州市内）

・九州国際大付属高等学校　・東筑紫学園高等学校　・愛成高等学校
・西南女学院高等学校　・北筑高等学校　・八幡中央高等学校
・八幡高等学校　・八幡工業高等学校

２．企画の詳細内容

目的

・市立の変化に応じた生徒が作る新しい試み
・クラスやブロック、学年の団結力を深める

内容

○Ｔシャツを着用する人
全校生徒　先生

○Ｔシャツの金額について
Ａサイト　1700円/枚～1750円/枚（送料無料）
Ｂサイト　1260円～1287円（送料無料）
Ｃサイト　1100円～1150円（送料込み）
Ｄ社　1000円～1100円

○Ｔシャツのデザインについて
前面　各ブロックの３年生に15㎝×15㎝以内でクラスまたは学年が入るデザインを考えてもらう
背面　生徒会が30㎝×42㎝以内で体育祭スローガンを入れたものを考える

○Ｔシャツの色について
１組：黄色　２組：黄緑　３組：水色　４組：紫　５組：鶯茶　先生：白

※新任副担任は各クラスの色を着用してもらう
※デザインは普通科、先生は黒。情報ビジネス科は白。

○Ｔシャツの素材について
ドライＴシャツ（速乾性あり）

３．アンケート結果

生徒からの意見

賛成意見
・世間一般にダサいと言われないようなデザインならいいと思います
・あったほうがテンションが上がるから。ブロックごとに頑張ろうという気持ちを強く表すことができると思うから。
・汗のにじみが目立ちにくいものがいいです
・自分たちのクラスごとでデザインを考えたい
・サイズを選択できるようにしてほしい

反対意見
・お金がかかって自分たちで払わないといけないなら嫌です

ＰＴＡへの説明の前に、教職員へのプレゼンを行った。その後、ＰＴＡ役員へのプレゼンを経て、Ｔシャツの作成・購入費用の支援について了承が得られたため、体育祭のＴシャツを作成することが決定した。

（かつての体育祭の様子）

（令和５年度：体育祭Ｔシャツを着て、校歌を歌う生徒たち）

●Ｔシャツは全５色、学年を縦割りして、３年生が中心となってオリジナルロゴを作成。

かつての体育祭では、全員が同じ体操服を着用しており、誰がどのチームなのかがわかりにくいなど、「個性」や「オリジナリティ」があまり感じられなかったが、令和５年度の体育祭ではチームごとの団結力や一体感がこれまで以上に高まったように感じる。

色合いやデザインを生徒が主体的に考えて製作し、そのＴシャツを保護者や地域の人たちの前で披露できたことの喜びや、大きなプロジェクトを達成することができた自分たちを誇らしく感じているようでもあった。

「大人が決めたことを、何も言わずに、ただ守る」のではなく、「自分たちの思いを言語化して、大人や周囲に働きかけて、変えていく」ことの喜びを味わった生徒たちの表情が一様に明るかったことが印象的であった。

一部の保護者からは、「このような取組にＰＴＡ会費が生きていることがうれしい。」「大変よい試みで感動した。」「私も欲しくなった。」などの声も寄せられた。

（キ）プロモーションビデオ「学校の色を決めるのはキミだ！」製作にチャレンジ

新しい学校づくりのスローガンの下、「学校ロゴづくり」「教職員ポロシャツづくり」、さらには「生徒による体育祭Ｔシャツづくり」など、校内で次々にチャレンジの連鎖が起き始めている。

次のチャレンジとして、教職員から上がってきたのは、「新しく生まれ変わる学校『シン・イチリツ』のイメージを対外的に発信したい。」「動画を作って発信するのはどうか。」との声であった。

この動画づくりに当たり、教職員だけが携わるのではなく、学校の雰囲気を感じてもらうためにも実際の生徒が出演してはどうかとの話が持ち上がり、教職員と生徒の有志が対話・協議して、本校が目指す教育理念などをイメージ化して発信することが決定した。

教職員がストーリーを考え、絵コンテを作成した。また、動画撮影するための場所選びに当たっては、教育委員会や市役所にも相談して決定した。

決して低くはないハードルがいくつもあったが、「プロモーデョンビデオを作成して、中学生や保護者、中学校教員にどのような学校にしたいのかを伝えたい！」との強い思いで乗り越え、８月にプロモーションビデオが完成し、２学期の始業式で、全校生徒に披露できた。

（体育館で全校生徒に披露する様子）

（出演してくれた生徒たち。前列右は本校校長。）

【プロモーションビデオ URL】https://youtu.be/UvORD4lmutE?feature=shared

（ク）保護者向けの説明会「歓迎！ナイトスクール」開催にチャレンジ

令和６年度から「普通科」が新学科「未来共創科」に再編されるに当たり、教職員から「保護者に対して学校のコンセプトや新学科が目指す方向性などをきちんと説明したい。」との声が上がってきた。保護者に向けて、何を、どのように伝えるべきかについて、新学科をけん引する普通科主任と「事業企画室」が中心となり、内容を検討した。

保護者向けの説明会「歓迎！ナイトスクール」でチャレンジしたこと

① 本校が目指す学び、「生徒の『やりたい』が実現できる学び」「年齢や分野の異なる人が協働し、課題解決を目指す体験型の学び」の必要性を伝えたい。

② ①がイメージできるようなワークショップを導入し、保護者にも体感してほしい。

③ 当日、保護者に質問を自由にしていただき、我々が目指している学びをより多くの方に知ってもらいたい。

①：学びの必要性

大人が子どもだった時分に比べて社会全体が大きく変化していること、大人が経験してきた同質性・均質性の高い学校教育から今は「学びの概念」が大きく変わっていることなどを保護者自身が深く理解して、腹落ちするような説明会にしなければならないとの認識で一致していた。

しかし、単に資料を配付して、「主体的・対話的で、深い学びが求められている。」「国の高校改革の流れも踏まえて、これから市高は変わっていくので期待してほしい。」などと本校の教職員が声高に叫んだとしても、果たしてその趣旨が保護者にきちんと伝わるのかとの懸念があった。

また、「『普通科』という、大人が慣れ親しんできた学科の冠がつかない新学科を選択した場合に、後々の大学入試で不利になったり、子どもの進路に何らかの影響が出たりすることはないのか。」など、保護者や中学生が不安に思っていることなども耳にしていたので、学校としても適切に説明できるようにしておかなければならないとも認識していた。

そのためには、「出口」である大学入試にフィーチャーした情報もしっかりと保護者にお知らせする必要がある。つまり、大学入試においても、「知識・技能」のみならず、「思考力・判断力・表現力」を重視する出題形式に変わってきており、本校での学びによってそれらの力が身につけられること、これからの大学入試でも大いに役立つ学びを提供していくことを保護者と中学生に伝え、理解を促進しなければならない。

そこで、本校のカリキュラム等ＣＮでもある北九州市立大学地域創生学群准教授の廣川祐司先生に本校の趣旨を伝え、相談したところ、「変化する『学力』の考え方と『大学入試』について」と題した講話を実施していただくことができた。

参加した保護者からは「大学のことがよくわかった」との感想や、「私たちの大学受験のときとこれほど大きく変わっているとは全く知らなかった。このように変わっているから、高校での学びを変えていくということなんですね。」という声もいただき、本校の目指す方向性に対する安心感なども高めることができたと感じた。また、保護者自身が昨今の教育分野における変化について詳しく学ぶ機会にもなったように思う。

②：学びのイメージの体感

本校での学びについて説明する際に、単に言葉で見聞きするのではなく、実際の学びのイメージ、特に協働的な学びのイメージを保護者の方に体感していただくことも

重要ではないかとの意見が教職員から出てきた。そのため、当日は、説明会の途中で４名の保護者グループがつくりやすくなるよう、着席する場所を計画的に指定する工夫も凝らした。

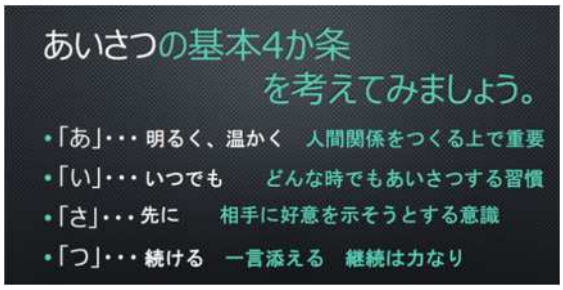
ただし、その４名は、当然知らない人同士であるので、アイスブレイク活動を最初に行って、互いに言葉を交わして場が温まった段階で、グループで話し合いながら協働して問いに答える形式のワークを取り入れることにした。

アイスブレイクでは、「あなたの『推し』について教えてください。」をお題目に設定し、自己紹介も兼ねて互いの興味関心について語り合う機会を設定した。

会場に来ていた保護者は、「説明を聞きに来ただけなのに、隣近所の人と話をしないといけないの？」といった感じで、最初はかなり困惑しており、少し遠慮がちな進み具合であった。

教職員が、「皆さん、お子さんたちは学校でこういう話し合い活動を日常的にしているんですよ。大人の私たちも当然できますよね？」などと声をかけると笑いが起こり、１名、２名と自分の「推し」について話し始めた。

すると、会場のあちこちから笑い声や共感する声が聞こえてくるようになり、一人の発言に対して質問を繰り返して深く話し合うグループや、終了の合図の後もずっと話しているグループも出てきたりして、大いに盛り上がったアクティビティとなった。ほんの 10 分程度の活動であったが、温かい雰囲気が会場全体に波紋のように広がっていったのが大変印象的であった。



その後、「あいさつの基本４か条を考えてみましょう。」というお題目で、問いに対する答えを互いに対話して導き出すワークを行った。

アイスブレイクでグループの仲が温まっていたことから、最初のスタートから話し合いが円滑に進み、「答え、絶対それですよね！」といった喜びの声だったり、「それはないだろう（笑）」など、面白い回答への笑い声が響いたりして、会場全体が賑やかで、大いに盛り上がった。

参加した保護者の感想には、「よくある説明会ではなく、保護者同士がコミュニケーションする時間もあって楽しかった」「子どもには、こういう場で学んでほしい」などの感想をいただくことができた。

③ 保護者の方からの質問を自由にいただくために

大きな会場であればあるほど、質問は遠慮がちになる。そのため、参加者が質問をスマートフォンから直接入力でき、できるだけタイムリーに答えられるように工夫した。

いただいた質問はプロジェクターに表示し、順次回答していった。最後の質問まで行き届かなかったが、閉会後にも、スタッフが会場に残り、個別に質問を受け付け、できるだけ不明な点を残さないでいいように対応した。

（保護者向けの説明会「ナイトスクール」の様子）

校長による説明

普通科主任による説明

北九州市立大学・廣川准教授による講話

※「歓迎！ナイトスクール」での資料及びアンケート結果は参考資料１・２のとおり。

（２）外部と一緒に考える・取り組む

ア　文科省事業における実施体制（教育委員会・本校）

本事業については、指導企画課が担当しており、課長及び係長が各１名、指導主事２名、職員１名の計５名で関係事務を総括している（前年度から２名増）。

指導主事のうち、１名は本校の教頭職であり、本校と管理機関とのパイプ役であるとともに、令和５年４月から民間人校長として就任した増田順校長先生を支援する役割も担っている。

管理機関は、定期的に本校を訪問し、生徒の様子や教育活動の視察などを行っている。また、本校の管理職と教育長との協議の場を適宜設けて、委員会全体での情報共有にも努めている。

令和５年度については、事務局予算（「北九州市立高等学校の魅力向上事業」）として5,390 千円を計上し、事業の円滑な実施に努めた。

平成４年度に本校の管理職、教務主任、主任等で構成される「市高魅力化検討委員会」を立ち上げ、新学科の在り方について検討を行っている。

メンバーの選定に当たっては、探究的な取組に積極的に取り組んでいる教職員を中心に、普通科と情報ビジネス科の両方から選定している。双方の科から選定しているのは、時代に対応した新しい学びを新学科のみで実施するのではなく、すべての学科で実施して本校全体を底上げする、すなわち「シン・イチリツ」としての強い意思を体現することを意図したものである。

これとは別に、「カリキュラム検討委員会」も校内に設置している。校長、副校長、教頭、教職員３名、カリキュラム等ＣＮ及び大学生が定期的に集まり、令和６年度からのカリキュラムの検討を行っている。

なお、検討したカリキュラム案については、令和５年度から試行実施しながらブラッシュアップしながら令和６年度からの新学科の設置に備えている。

イ　コーディネーターの配置及び活用内容

令和５年度は、３名のコーディネーター（以下「ＣＮ」という。）を配置した（前年度と同様に、必要なときに活用する「単発型」での配置）。内訳は、「カリキュラム等ＣＮ」「広報魅力化ＣＮ」「探究学習支援ＣＮ」が各１名である。

「カリキュラム等ＣＮ」には、前年度に引き続き、北九州市立大学地域創生学群の廣川祐司准教授にご就任いただいた。廣川ＣＮは、北九州市立大学で入試広報センター委員及び大学全体の教育改革推進室委員を務めている。また、高大連携事業や高大接続に係る取組をゼミ活動として行い、近隣の高校と連携した「地域課題解決型学習」の実践を行っている。大学入試改革の動きに関する情報把握や大学との連携・協働体制を充実させる必要があるため、適任と判断してご就任いただいている。

令和５年度からは、インターンシップ生として、廣川ゼミの学生１名が週３回ほど来校し、本校での探究学習の支援や生徒のグループ活動の補佐などを担ってくれている。「年齢が近い大学生」「よいロールモデル」と日常的に交流する機会があることで、高校生にとっても刺激となり、また進路や学習上の悩みごとなどのよき相談相手にもなっている。

また、フィールドワークをするときなどには、インターンシップ生が仲間の大学生に声をかけてサポート要員を確保してくれるなど、高校生が多様な人材と交流する機会の拡充にもつながっており、大変よいサイクルが生まれている。

「広報魅力化ＣＮ」には、前年度と同様に、ＹＫ　ＳＴＯＲＥＳ株式会社　代表取締役吉田一直氏にご就任いただいた。吉田氏は、市役所や市内の大学とコラボレーションした動画制作、商品開発などに数多く携わっており、市内の複数法人のＰＲアドバイザーにも就任しておられることから、広報部門のＣＮとして、本校の魅力発信に係る技術的な助言等をお願いした。

令和６年度の生徒募集ポスターのレイアウトや色調、デザインなどについても相談して、これまでにない斬新な広報につなげることができた。

「探究学習支援ＣＮ」には、西南女学院大学の非常勤講師である大庭正美氏にご就任いただいた。大庭ＣＮは、北九州市教育委員会の元・指導部長であり、小学校の総合的な学習の時間や特別活動の分野で多大な功績を残している。

「探究」は、総合的な探究の時間や新しい学校設定教科の中だけで実施すればよいものではなく、日々の授業において教科横断的に実施されるべきである。そのため、大庭ＣＮには授業を視察していただき、質問の仕方、声かけのポイント、話し合い活動の留意点などについてご助言いただいた。令和５年度については日時の調整が難しく、数回程度の実施に留まったが、次年度は継続的に授業を見ていただくことを予定している。

ウ　市高魅力化コンソーシアム

コンソーシアムについては、前年度からの議論を引き続き行うため、構成員に大きな変更はないが、大学生と地域をつなぐコミュニティの場づくりなどに尽力しておられる 20 代の若い構成員にも入っていただいた（中治・肥田構成員）。

前年度までは、オブザーバーとして、カリキュラム等ＣＮには参加いただいていたが、令和５年度は３人のＣＮ全員にもお声かけして、ご参加いただいた。

コンソーシアムは、７・８月・11 月・１月に開催した（計４回）。初回は、一連の報告事項の後、アイスブレイクを兼ねたワークショップを行い、新たに導入する探究的な学び「イチリツ・プロジェクト」に対する期待や意見、提案などを自由に議論いただいた。

スクール・ポリシーに関しては、立派なことを書いて飾っておくだけでは意味がなく、一つ一つの教育活動や生徒との接点の中でこのポリシーが生かせるように、教職員がチェックし合いながら、日々確認しながら進めていくようにとのご意見もあった。

２回目以降の会議では、高校入試の在り方について議論が拡がり、入試改革をドラスティックにやることで学校が変わるのは間違いないので、学力ではない特色で生徒を集める手法を検討してみることなどのご提案をいただいた。検討の結果、令和６年度の特色化選抜においては、「コミュニケーション重視型選抜」（グループワーク及びグループ面接）及び「評定重視型選抜」（グループ面接）の２パターンで定員（200 名）のうち半数を選抜することになった。本校を受検する中学生が、本校のスクール・ポリシーを踏まえて表現する内容をしっかり聞くような入試制度にもしていただきたいとのご意見もいただいている。

（区分内で五十音順・敬称略）
◎：座長　　○：副座長

区分	氏名	所属
学識経験者	◎ 中尾（なかお）　基（もとい）	国立大学法人　九州工業大学 工学研究院基礎科学研究系　教授
	眞鍋（まなべ）　和博（かずひろ）	公立大学法人　北九州市立大学 地域創生学群　教授
企業関係者	山井（やまい）　高広（たかひろ）	日本政策金融公庫　北九州支店 国民生活事業　事業統轄
	平畠（ひらはた）　暁（さとる）	九州電力（株）北九州支店 副支店長　兼　企画・総務部長

民間関係者	○ 福泉（ふくいずみ） 亮（あきら）	Nature&KOKOROZASHI アルビレオ　代表 北九州市立ユースステーション　スタッフ
	中治（なかじ） 航太（こうた）	GZ キャピタル株式会社 北九州イノベーションセンター事業部
	肥田（ひだ） 光（ひかり）	有限責任監査法人トーマツ ジュニアスタッフ 前・ReCITAL 株式会社　福岡支店長
行政関係者	髙松（たかまつ） 淳子（じゅんこ）	北九州市教育委員会　学校教育部長
	田丸（たまる） 陛子（のりこ）	北九州市教育委員会　学校教育部 教育振興担当課長

※議事概要は参考資料３のとおり。

エ　北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会

運営指導委員会の委員については、前年度からの議論を引き続き円滑に行うため、前年度と同様のメンバーを選定した（中学校長会の改選に伴う委員変更のみ）。運営指導委員会には、「カリキュラム等ＣＮ」にも参加を依頼して、カリキュラムの検討状況などについても情報を共有していただいた。

運営指導委員会は、７・10・１月に開催した（計３回）。スクール・ポリシー案、カリキュラムの検討状況、新学科の周知状況、入試改革などについて協議し、本校に対する従来のイメージ（昭和の学校、部活動をしに行くための学校など）から、多様な学びに基軸を置いた学校にシフトしていく上での留意事項などについてご意見をいただいた。

（区分内で五十音順・敬称略）
◎：委員長　　○：副委員長

区分	氏名	所属
学識経験者	◎ 元兼（もとかね） 正浩（まさひろ）	九州大学大学院 人間環境学研究院　教授
企業関係者	永野（ながの） 恵（けい）	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング（株） 政策研究事業本部 公共経営・地域政策部　副主任研究員
	羽田野（はたの） 隆士（たかし）	北九州商工会議所　専務理事
民間関係者	麻生（あそう） 浩二（こうじ）	北九州市立高等学校 ＰＴＡ会長

行政関係者	○　甲斐（かい）　孝一（こういち）	北九州市立中学校長会　組織部長 北九州市立富野中学校　校長

※議事概要は参考資料４のとおり。

（３）様々な分野の方々との出会いがあふれる学校へ

ア　学校内外での大学生との活動

令和６年度から本格実施する学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」（以下「イチプロ」という。）の一部を、令和５年度に第１学年でプレ実施した。プレ実施に当たっては、北九州市立大学地域創生学群の学生に学習支援（伴走）してもらいながら進めている。

教職員は、これまで街歩きして課題を発見するという体験をしたことがなかったが、学生は校外実習に慣れていることから、実体験に基づいて生徒にアドバイスできるよさがあり、随行の教職員が学生から学ぶことは少なくない。また、生徒と学生は年齢も近いことから、よいロールモデルでもある学生たちとの学びは、生徒にとっても大変よい刺激となっている。

令和６年度からの体験的な学びやイチプロの実施についても、大学生による学習支援を継続する予定である。

○　大学生が課題を発見するために必要な視点を説明。チェックポイントに大学生が待機し、生徒らの途中報告（課題発見の状況）を聞きながら、次の目的地に向けたアドバイスを行った。

（チェックポイントでの様子、体操服は本校生徒、私服は大学生）

○　フィールドワークで発見した課題を整理・分析する様子。大学生から方法を教えてもらったり、生徒が相談したり、大学生が学習の進捗について助言

○　　体育館で、グループごとに課題をまとめ、その課題解決に向けた取組について発表している様子。大学生各発表ブースでのファシリテート。

イ　大学生インターンシップの受入れ

北九州市立大学との協議に基づき、本校に５か月間（令和５年９月～１月）、長期インターンシップ生（地域創生学群３年生）を１名受け入れた。

本校での業務として、令和６年度から導入する地域社会課題を踏まえた体験的な学び、令和６年度からの学校設定教科「イチプロ」のプレ実施に係る業務のサポートをお願いした。

長期インターンシップ生は、探究的な学びが充実していることで定評のある高校に通っていたときの学習経験、大学での実習における経験などを踏まえ、生徒が使用す

るワークシートの作成や、体験的な学習を実施する際の留意事項などを教職員にアドバイスする役割も果たしてくれた。

また、生徒たちと年齢が近いことから、教職員たちから持ち寄られるアイディアに対して「こういう視点で投げかけたほうが生徒には理解しやすいと思う。」など、若者ならではの助言などもあり、教職員にも頼りにされる存在となっていったことが印象的であった。

生徒たちにとっては、よいロールモデルたる大学生が日常的に校内にいて、学習のサポートや困りごとの相談などに応じてくれる環境が整備されたことにより、大学生活がイメージしやすくなり、また教職員との関係とは異なる「ナナメの人間関係」が身近に生まれることで、生徒が幅広いネットワークを構築して、広い視野を持つきｋっかけにもなった。

○　長期インターンシップ生が作成した資料（一部抜粋）

ウ　大学との連携

（ア）九州工業大学と連携したアントレプレナーシップ教育

九州工業大学が中心となり、アントレプレナーシップ教育を展開。講話とワークショップ（ワークショップへの参加は一部の生徒）がセットとなる学びの提供をいただいた。

アントレプレナーシップとは何か、九州工業大学特任教授から講話をいただき、実際に起業された経営者の方から、社会で必要とされるビジネス力を中心した講話、最後に北九州市立大学 国際環境工学部教授からスタートアップとは何か、新しいビジネスを始める際の着眼点についての講話をいただいた。

この３者の講話に引き続き、本校生徒数名が九州工業大学が展開するアントレプレナーシップの３日間ワークショップに参加した。

※下の写真は、３者の講義の様子

（イ）九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学及び西日本工業大学との連携協定締結

本校は、令和５年９月 25 日付けで学校法人東筑紫学園に属する九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学と、同年９月 28 日付けで学校法人西日本工業学園に属する西日本工業大学との連携協定を締結した。

九州栄養福祉大学とは、従前から本校の情報ビジネス科が「食」を中心とした連携を進めており、西日本工業大学とは令和５年度からｅ－スポーツや３Ｄ造形等に関する先端的かつ実践的な学びを協働して進めている。

これらの協定を通じて、本校の探究的な学びをさらに進展させることを目指している。

九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学

西日本工業大学

＜九州栄養福祉大学の専門性を生かした学び＞

北九州市若松区にある響灘菜園株式会社で年間 100ｔ以上発生し、市場に出回らない規格外野菜を活用して、レトルトの「トマトのおんがえしカレー」を製作して販売し、その収益の一部をこども食堂に寄付する活動を実施した。

九州栄養福祉大学がレシピを、西日本工業大学がパッケージデザインを考案して、情報ビジネス科の市高生がマーケティング・販売を行った。

大学・高校がそれぞれの専門性を生かし、１つの商品の開発から、パッケージング、販売までを連携し

て手掛けることができた。

今後は、これらの取組に未来共創科の生徒たちも関わるなど、それぞれのアイディアや専門性・強みが発揮できる取組を増やしていきたい。

増やす過程では、生徒が取り組みたいプロジェクトにおいて、どのような専門性を有する人や団体と共創したいのかなども考えさせながら、生徒が主体的に考えながら進められるようにしたい。

＜西日本工業大学の専門性を生かした学び＞

高等学校では、情報Ｉの授業が必須となり、情報の科学的な見方・考え方、情報と情報技術を活用した問題解決の手法等を学び、実践に生かしていくことが求められている。

そのため、西日本工業大学に依頼して、ＡＩを活用した取組事例やＡＩリテラシーに係る講話を実施いただいた。

また、教育課程外の選択授業「市高タイム」の講座の一つとして、「ＩＴ関係の探究的な学び」を設けており、生徒が西日本工業大学おばせキャンパスに足を運び、３Ｄプリンタ、ＡＩを活用したロボット、プロジェクションマッピングの仕組みや作り方などについて、大学の教授陣や学生から直接ご説明いただき、最新のテクノロジーに触れる体験的な学びにご協力いただいた。

専門的な機器類が整ったキャンパスを実際に訪問し、学生が学ぶ様子などを目にすることにより、生徒たちはテクノロジーの進化や理系分野の学びへの関心を高めるとともに、高校卒業後の進路について深く考える機会にもなった。

エ　他校の生徒との交流

令和５年８月 29 日に、文科省事業の指定校である熊本市立必由館高等学校と広島市立美鈴が丘高等学校の生徒を本校に招き、各高校で実践しようとしている取組等について、生徒同士が意見交換する交流会を行った。

これまでの本校では、他校の生徒との交流と言えば部活動での試合程度で、生徒同士のネットワークづくり、生徒の視野を広げることなどに着目した今回のような交流イベントは実施したことがなかった。そのため、本校でそのような意欲が高まったこと自体が大変画期的なことであった。

アイスブレイク（自己紹介）から始まり、交流が深まりように４人１組で班分けし、ワークショップ形式での意見交換を行った。食堂でランチを食べながらの交流会も行った。

生徒同士の交流に当たり、教職員側から提供したのは交流の場だけである。つまり、生徒たちに特にテーマを与えたわけではなかったが、生徒が互いの学校の違いに着目し、学食での食べ物や高速、学び方の違いなどがテーマとして自然と浮かび上がることを目の当たりにした。「自分たちの校則は本当に必要なのか」「どうすれば校則を変えることができるのか」など、休憩時間の際などにも生徒同士で情報交換をしていたのが印象的だった。

こうした生徒たちの姿を目の当たりにして、生徒のみならず、教職員も交流の良さを実感し、年齢が同じでも、学ぶ環境等が異なる生徒同士が交流をする機会を次年度はもっと増やしたいと思う。

反省点としては、生徒同士の交流に注力してしまい、教職員同士が交流する機会をもっと充実させるべきであったということである。そのため、令和６年度は生徒の学びの充実につながるようなワークショップ型の教職員交流の機会を設けて、教職員のネットワークづくりにつなげていきたい。

今回の取組を通じて、生徒たちは現在もＳＮＳ等で交流を続けており、その後の校則がどのように変わったのか、意見交換により自分たちの取組がどのように変わったのかなどについて継続的に情報交換している。生徒にとって大変貴重な機会になったことから、学校としても、様々な意見や考えを持つ人たちとの出会うことができる機会を充実させていきたい。

※写真：生徒たちの交流の様子

オ　企業等との連携

（ア）日本ＩＢＭ株式会社との取組

北九州市は、地域のデジタル・トランスフォーメーション(ＤＸ)、グリーン・トランスフォーメーション（ＧＸ）の推進や、雇用の創出及び企業誘致活動の促進を図るため、令和４年８月４日に日本ＩＢＭ株式会社と連携協定を締結した。

協定の項目には、「デジタル人材の育成」などが盛り込まれており、本校では令和５年５月 19 日及び 10 月 13・14 日に本校の生徒を対象としたワークショップを実施いただいた。

いずれも、テーマは「Tech for Good： 市高がテクノロジーで北 Ｑ の未来を加速する」である。冒頭に「デザイン思考」の考え方をご教示いただいた上で、「ポイ捨てをなくすためにどうすればよいのか」をテーマに、ＩＢＭの社員が生徒たちの話し合い活動をファシリテートする形で進行した。教職員は、その様子を傍聴する形とし、教職員研修の一環にも資することにした。

「デザイン思考」は、実際に企業でも幅広く取り入れられている思考手法であり、ワークショップを通じて、生徒が新たな発想や考えを生み出すための体験的な学びを行った。

この取組では、「どんな意見も否定しない」ことをグランドルールとしていたため、心理的な安全性が確保された環境下で、生徒たちの思考や発想が柔軟かつ豊かとなり、普段は発言が少ない生徒が積極的に対話に参加する姿もあった。

ファシリテーターが投げかける言葉によって生徒が発言しやすくなったり、自分の発言が認められたことに喜びの表情を見せたりしているのを目にして、教職員の中には、「『上から目線』の大人の関わり方が原因で、日頃の学校生活において生徒が自分の考えを伝えにくくなってしまっているのではないか。」と振り返る者もいた。ワークショップの後、プログラムを参観した教職員が数名で振り返りを行っていたが、その際にも、大人（教職員）の生徒への関わり方を見直す必要があるとの話が出ており、大事な気づきの機会にもなったようである。

（イ）福岡県中小企業家同友会との取組

令和５年度に、北九州市立大学基盤教育センターひびきの分室の石川敬之教授からのご紹介で、福岡県中小企業家同友会（以下「福岡同友会」という。）とつながることができた。

福岡同友会から、「山形同友会と山形大学が、香川同友会と香川県立三木高等学校等が先行して実施している『共育型インターンシップ』（香川県での呼称は『インタビューシップ』）の取組を、福岡同友会と市高とで一緒にやってみませんか」とお声かけいただいた。

「共育型インターンシップ」とは、学生（生徒）が地元企業を訪問し、経営者や従業員に企業の経営理念や事業内容、地元貢献の思いなどを聴き取り、学生（生徒）が進路選択について考えたり、働くことの意義について考えたりすることにつなげる取組である。また、企業の社員にとっては、学生（生徒）に説明する上で、会社の経営理念に係る振り返り、「自分はなぜ働いているのか」などと改めて考え直すなど、社員教育にもなっている。企業・学生（生徒）の双方に有益な取組であることから、「共育型インターンシップ」と呼ばれている。

令和５年７月 31 日から８月１日に、教育委員会と本校の教職員も福岡同友会の皆様に同行して、香川県での取組を視察させていただいた。三木高校での導入の経緯、生徒が企業訪問している様子、インタビューシップを体験した生徒の感想や変容などについて学ぶことができ、大変貴重な機会となった。

視察に参加した教職員から、キャリア教育の充実に生かすため、本校生徒の視野や職業観を広げるためにも是非やってみたいとの声が上がり、本校の１年生 17 名を対象に冬休み期間中に導入することが決定した（生徒１名につき１社）。

導入前に、香川県立三木高校とのオンライン交流会を実施し、取組を実施する上で留意する点などについて教えてもらった。また、企業訪問に当たってのマナーや実習態度、お客様への接し方、服装、身だしなみ、インタビューする際の心得などについても事前に校内でしっかり身につけられるように心掛けた。

冬休み期間中に、生徒は一人で会社を訪問し、２～３日間を企業で過ごしながら、経営者や従業員の方々にヒアリングを行い、その内容をパワーポイント１枚にまとめた。

３月９日に発表会を開催し、参加した生徒と受け入れ企業が一堂に会し、生徒一人ひとりがそれぞれの取組を発表した。企業からは「自分たちの仕事の意味や価値を改めて考える機会になった」との声が寄せられ、また生徒からは「北九州市にこんなに熱い企業・会社があることがわかった。」「後輩たちにも是非経験してほしい。」などのコメントに加えて、働くことの意義、自分の親に対する感謝の気持ち、これからの進路などについて深く考えるきっかけにもなったようである。

令和６年度は、この取組を新１年生 200 名で実施する予定であり、既に福岡同友会との打合せなどを行っているところである。

このような、双方にとってメリットがある取組を積極的に取り組もうとする意欲が教職員間に生まれてきたことは大きな成果であり、さらに充実させて、生徒たちの輝かしい未来につなげていける学校にしていきたい。

※本校における「インタビューシップ」関連資料は参考資料５のとおり。

（４）「高校魅力化評価システム」から見えてきた変化

ア　生徒編

令和４年度に引き続き、令和５年度も「高校魅力化評価システム」を活用して調査を実施した。

本校で特に注視すべき項目と考えていた設問が、令和５年度調査ですべてプラスに転じたことは、教職員の多大な努力の結果であると一定の評価をしている。しかし、学年によって結果にばらつきが見られることや、急激に数値が上昇したことの理由や根拠が明確になっていない項目が多く、「このくらいの取組でよいのだ。もう十分である。」などと、数字だけを見て誤った解釈をしてしまったり、取組が停滞してしまったりすることも危惧される。

そのため、本校において、必要に応じて追跡調査を行うことや、今回の結果を踏まえて生徒や教職員がどのように感じるのかをワークショップ形式で行うことなども検討するべきではないかと考えている。

【「高校魅力化評価システム」の結果比較（生徒編）】

番号	質問項目	Ｒ４年度 生徒回答	Ｒ５年度 生徒回答
90	この学校を中学生におすすめできる	56.5%	69.9%
66	この学校に入ってよかったと思う	70.2%	75.6%
20	失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある	64.8%	76.1%
22	人と違うことが尊重される雰囲気がある	68.3%	78.2%
17	本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある	75.9%	76.8%
29	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	44.4%	64.6%
39	現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	62.4%	64.8%
32	自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	42.2%	57.2%
61	地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	47.1%	62.2%
67	学習を通じて、自分がしたいことが増えている	67.8%	77.8%

イ　教職員編

本校では、令和５年度からの教育目標の一つとして「どの学校よりも圧倒的に多様な学びを提供すること」を掲げている。教職員の中には、今年度から、授業の中で「話し合う活動」や「協働して課題解決を行う活動」「専門的な知見のある外部人材を活用した活動」を行う頻度が昨年度までより大幅に増加した者もいる。

教職員へのアンケートについても、25 項目中 20 項目で、令和４年度よりも高い、肯定的な回答を得ることができた。その 20 項目のうち、13 項目では５ポイント以上高くなっているこ

ともわかった。

特に、「協働性」ついては全項目で肯定的な回答を得ているが、このうち、「人と違うこと、異なった意見を尊重している。」については、昨年度よりも 25.3 ポイントも高い結果となった。

【「高校魅力化評価システム」の結果比較（教職員編）】

	質問項目	R４年度 教職員回答	R５年度 教職員回答
主体性	失敗を恐れずに挑戦することができている。	58.3%	48.0%
	目標や当事者意識をもって挑戦することができている。	73.3%	60.0%
	自身の挑戦に、周囲を巻き込もうとしている。	40.0%	40.0%
	挑戦する人に対して、応援することができている。	73.3%	84.0%
	誰かが何かに挑戦しようと思ったとき、手を差し伸べている。	80.0%	84.0%
	子どもの自己決定を尊重できている。	63.3%	68.0%
協働性	人と違うこと、異なった意見を尊重している。	43.3%	68.0%
	ありのままの個人を尊重している。	56.7%	76.0%
	自分と異なる立場や役割を持つ人と交流している。	50.0%	76.0%
	立場や役割を超えて協働している。	63.3%	68.0%
探究性	本音を気兼ねなく発言できる。	26.7%	40.0%
	地域に、将来のことや実現したいことを話し合える人がいる。	30.0%	48.0%
	生徒に対してじっくりと話を聞き、考える手助けができている。	80.0%	76.0%
	お互いに問いかけあう機会がある。	46.7%	64.0%
社会性	自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会を持てている。	26.7%	60.0%
	生徒の関心に合わせて、機会を提供できている。	66.7%	64.0%
	地域の人や課題などにじかに触れる機会を持てている。	26.7%	44.0%
	地域で生徒を育てるという意識を持っている。	36.7%	52.0%
	この学校を中学生におすすめできる。	56.7%	60.0%
	この学校に関わってよかったと思う。	76.7%	80.0%
	この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる。	66.7%	80.0%
	授業の質の向上につながっている。	40.0%	68.0%
	自身の資質・向上につながっている。	36.7%	80.0%
	学習意欲が高まった生徒がいる。	46.7%	76.0%
	業務負担感の軽減につながっている。	0.0%	8.0%

※「高校魅力化評価システム」の結果については、参考資料６のとおり。

さらに、総合的な探究の時間に、北九州市立大学地域創生学群の大学生が学習支援に入ってもらい、大学生と意見交換・交流する機会を設けたり、他の高校（熊本市立必由館高等学校や広島市立美鈴が丘高等学校など）との交流の場面を意識的に作ったりするなど、新しい

試みにも着手するようになってきた。

今年度は、「まずは、学校外の人と交流してみよう！」からの漠然としたスタートであったが、結果的に様々な立場や考え方の人と交流する機会が充実して、順調に実施できた。生徒たちは、学校外の方々との交流を通じて既成概念に捉われすぎることなく思考を深める楽しさを味わうことができた。生徒たちの変容を目の当たりにした教職員たちは、その効果を実感することとなり、「日々の授業の展開方法をこれまで以上に工夫して、よりよいものにしていきたい。」など、積極的かつ主体的な発言が増えてきたように思う。

しかし、今はまだ学校全体としての取組とまでは言いづらい状況であるため、令和６年度以降も、教職員が生徒たちの変容から新しい発見につなげていく場面を意図的に設けたり、様々な教科において多様な人が関わり合い、交流したりする機会を増やしていきたい。

※北九州市立大学による「リーダーシップ研修」の資料等は、参考資料７のとおり。

（５）学校の教育理念の柱をつくる

ア　スクール・ミッション

◆スクールミッション「このような学校にします。」

市内唯一の「市立」高等学校の強みである北九州市のリソースを活用して、「産・官・学・民」と連携・協働しながら、絶えず変化する未来の社会や世界をけん引する若者を育成します。

本校は、北九州市唯一の高等学校であり、市役所や市内の企業等から声をかけていただきやすい土壌があり、産・官・学・民との連携がしやすい学校であることは本校の強みでもある。そのため、その良さをスクール・ミッション（令和５年３月 30 日策定）にも掲げ、教育活動の充実を図っている。

しかし、これまでの本校は「学校の中だけで何とかしなければ」といった内向きの意識が強すぎる側面があり、なかなか継続的な取組や活動の広がりまでには至らなかったのが実情である。さらに、コロナ禍がそれに拍車をかける形となり、外に開かれた活動自体が停滞・減少してしまっていた。

そのため、令和５年度については、「スクール・ミッションで掲げた目標が体感できる学校づくり」を目標に据えて、「外部に開かれた市高」への変革を目指すことにした。

その結果、日本ＩＢＭ株式会社や西日本工業大学等による乗り入れ講話、北九州市立大学等と連携・協働した授業づくり、生徒が地域のイベントで市高の取組を発表する機会の設定など、これまで以上に多様な活動・実践につながり、生徒のみならず、教職員の視野やネットワークが広がっていった。「もっと〇〇したい。」「あの学校のように〇〇してみたい。」「より専門性の高い学びを生徒に提供したいが、どうしたらよいか。」など、ポジティブな「欲」が出てきたのは大きな変化である。

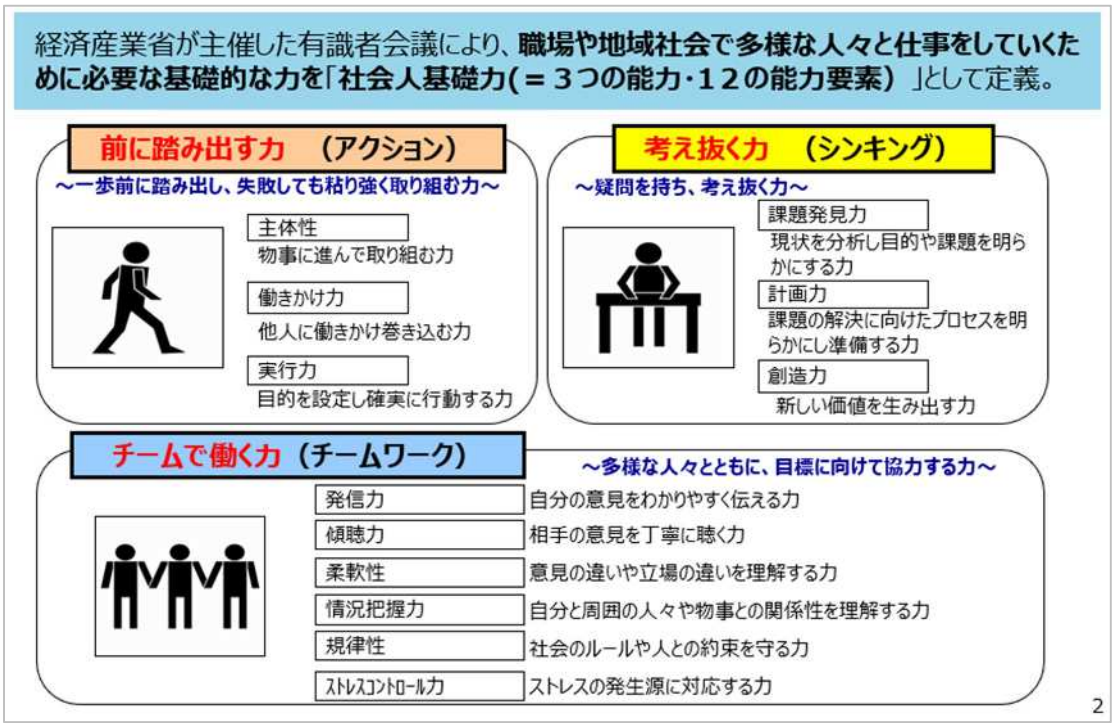
令和６年度以降は、これらの取組が総探や教育課程外の「市高タイム」の時間にとどまらず、教科横断的な学習にも生かせるようにしていきたい。

イ　スクール・ポリシー

本校では、令和５年 11 月にスクール・ポリシーを策定した。

本校での学びを通じて、学習指導要領が目指す「生きる力」の３要素（①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力、③学びに向かう力、人間性）をバランスよく身につけられることを前提としている。

具体的な資質・能力については、経済産業省が平成 18 年に公表している「社会人基礎力」の概念図がわかりやすいので、それらも参考にしながら原案を作成した。



この学校がどんな教育を提供する学校なのか、この学校で学んだらどんな自分に出会うことができるのか、そのことを対外的に一番ＰＲすることができるのは入学者選抜のときである。

実は、令和４年度の段階で、試験的にスクール・ポリシー（案）を作成して、令和５年度入学者選抜入試要項において示してみたが、特色化選抜や推薦入学者選抜などへの出願者の志願理由において、アドミッション・ポリシーに触れたものなどは全く見当たらなかった。つまり、市高の「魅力」が十分に浸透しきれていない、生徒や保護者にとってわかりやすい内容になっていないことが明確になった。

その反省に立ち、令和５年度に改めてスクール・ポリシーについて改めて学校内で協議し、さらにはコンソーシアムや運営指導委員会でも提示して、ご意見をいただきながら以下のとおり策定した。

◆グラデュエーション・ポリシー（GP）「このような力を育成します。」

<未来共創科・情報ビジネス科共通>
○ 一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組むことができる力
○ 疑問を持ち、考え抜くことができる力
○ 多様な人々とともに、目標に向けて協力できる力
○ 社会の変化にしなやかに対応できる力
<未来共創科>
○ 課題解決に向けて、多様な人々を巻き込み実行力のあるチームを形成する力
<情報ビジネス科>
○ ビジネスの視点で課題解決に取り組むことができる力

◆カリキュラム・ポリシー（CP）「このような学びを展開します。」

<未来共創科・情報ビジネス科共通>
○ 産・官・学・民などの多様な人々と共に探究的な学びの充実を図ります。
○ ICT を様々な場面で活用した学びの充実を図ります。
○ 各教科・科目において、課題解決型の学びの充実を図ります。
○ 社会の変化に対応し、活躍している人との交流を図ります。
○ 地域の活性化に向けて、異学年・異学科でチームを構成し、チームで探究するプロジェクト型の実践的な学びの充実を図ります。
<未来共創科>
○ 多様な人々と関わりながらチームを形成し、課題解決に協働して取り組む学びの充実を図ります。
<情報ビジネス科>
○ 地域活性化に向けて、ビジネスの視点で捉え、チームで探究するプロジェクト型の実践的な学びの充実を図ります。

◆アドミッション・ポリシー（AP）「このような生徒を受け入れます（求めます）。」

<未来共創科・情報ビジネス科共通>
○ 何事にも粘り強く取り組みたい生徒
○ 現状に満足せず、向上したい生徒
○ 他者と協力し、課題解決に取り組みたい生徒
○ 探究的な学びに深く取り組みたい生徒
<未来共創科>
○多様な人々を巻き込みチームを形成し、チームの一員として他者と協働し、課題解決に取り組みたい生徒
<情報ビジネス科>
○ 商業教育をとおして、地域活性化に取り組みたい生徒

スクール・ポリシーを令和６年度の入学者選考要項の冒頭に掲載し、本校の教職員のみならず、入学志願者にも本校が目指す教育方針や方向性がわかるように工夫するとともに、入学志願者が「なぜ市高なのか」「なぜ自分は市高で学びたいのか」など、本校への志願動機を再確認できるようにした。

また、志願要件や内定基準の観点の中にもアドミッション・ポリシー（ＡＰ）を盛り込み、志願者が志願動機を再意識できるように工夫した。

【参考】赤枠は令和６年度北九州市立高等学校入学者選抜要項に示したＡＰ

6	次の全学科共通の要件及び学科別の要件をすべて満たす者であること。 **<未来共創科・情報ビジネス科共通>** ○ 何事にも粘り強く取り組みたい生徒　○ 現状に満足せず、向上したい生徒 ○ 他者と協力し、課題解決に取り組みたい生徒　○ 探究的な学びに深く取り組みたい生徒 **<未来共創科>** ○ 多様な人々を巻き込みチームを形成し、 チームの一員として他者と協働し、課題解決に取り組みたい生徒 **<情報ビジネス科>** ○ 商業教育をとおして、地域活性化に取り組みたい生徒

（４）　内定基準【特色化選抜】<未来共創科・情報ビジネス科共通>

各選抜方法の内定基準は、以下のとおりとする。

【コミュニケーション重視型選抜】	**【評定重視型選抜】**
出願時に提出する調査書における３年次の**評定合計が２７以上**の者で、次の**観点１**、**観点２の評価が優れていると認められる者**	出願時に提出する調査書における３年次の**評定合計が３２以上**の者で、次の**観点１の評価が十分であると認められる者**

観点１	「他者の意見や他者から求められている事」及び「与えられた課題」に対して、自分の考えを表現することができる。
観点２	他者と協働し、主体的に課題解決に取り組むことができる。

その結果、令和６年度入学者選抜のおける特色化選抜や推薦入学者選抜の志願理由書の中に、アドミッション・ポリシーに関する文言が記載されるようになり、「こういう学びを期待するから市高に入学したい。」といった明確な意思が感じられるものが増え、偏差値ではなく、市高の「中身」に着目してくれていることがよくわかった。

一方で、それは本校での学びへの期待の声であり、教職員の姿勢・態度、授業内容など（現実）が、スクール・ポリシー（理想）と大きくかけ離れたものになっていないかを今一度よく確認し、常にスクール・ポリシーに立ち返って教育活動を展開していく必要がある。

そのため、学校行事等の企画や授業を実施する際などには、「これはスクール・ポリシーの何に該当するのか」「何を目指してこの取組をやっているのか」などを常に明確に結び付け、意識するように学校内でも周知徹底していきたい。

（６）高校入試改革

ア　インターネット出願方式の導入

これまで、入学願書を作成に当たり、下書きやボールペンで記入することに多くの時間をかけるなど、これまで志願者や保護者に大きな負担となっていた。そのため、ＤＸ

推進と志願生徒・保護者の負担軽減の観点から、インターネット出願方式に切り替えた。

導入初年度ではあったが、県内でも既に多くの私立高校が導入済みであり、保護者も慣れていることから、大きな混乱は発生しなかった。

保護者からは、「スマホからも手軽にできた。」「願書作成に当たり、これまでは中学校に出向いて担任と進路相談の上、願書の下書き、ボールペンで清書、入学選考料の支払いなどで、２時間はかかっていた。しかし、今回からは大きく時間短縮できて助かった。」など、今回の取組を評価する声が多数寄せられている。

しかし、中学校が調査書を本校に持参するなどの旧来からの事務が残っているので、これらについても改善できるよう検討したい。

イ　コミュニケーション力を重視した選抜制度の検討・導入

本校の令和６年度入学者選抜では、３つの選抜方法で入学選考を行った。

① 特色化選抜
② 推薦入学者選抜
③ 一般入学者選抜

特色化選抜は、福岡県では平成 31 年度入試の際に初めて導入された制度で、「学校の特色にふさわしい生徒の入学をより一層促進する観点から、生徒の多様な個性を積極的に評価する」ことを重視した自己推薦型の選抜方法である。

上記①～③のいずれの選抜方法も、アドミッション・ポリシーに基づいて選考するものであるが、特に①特色化選抜については志願者の資質・能力が表出しやすい選抜方法となるように検討を重ねた。

【参考】令和６年度北九州市立高等学校入学者選抜要項から一部抜粋

6	次の全学科共通の要件及び学科別の要件をすべて満たす者であること。 **<未来共創科・情報ビジネス科共通>** ○ 何事にも粘り強く取り組みたい生徒　○ 現状に満足せず、向上したい生徒 ○ 他者と協力し、課題解決に取り組みたい生徒　○ 探究的な学びに深く取り組みたい生徒 **<未来共創科>** ○ 多様な人々を巻き込みチームを形成し、 チームの一員として他者と協働し、課題解決に取り組みたい生徒 **<情報ビジネス科>** ○ 商業教育をとおして、地域活性化に取り組みたい生徒

【参考】令和６年度北九州市立高等学校入学者選抜要項（特色化選抜）から一部抜粋

特色化選抜（詳細は５～７ページを参照）

◆ **選抜方法について** ＜未来共創科・情報ビジネス科共通＞

次の２つの選抜方法より選択し、志願するものとする。

選抜方法	コミュニケーション重視型選抜	評定重視型選抜
内定者数の目安	未来共創科と情報ビジネス科合わせ **「１５名程度」を目安**とする。 ※志願者数により変更することも考えられる。	未来共創科と情報ビジネス科合わせ **「８５名程度」を目安**とする。 ※志願者数により変更することも考えられる。

◆ **内定基準について** ＜未来共創科・情報ビジネス科共通＞

選抜方法	コミュニケーション重視型選抜	評定重視型選抜
内定基準	出願時に提出する調査書における３年次の**評定合計が２７以上**の者で、次の**観点１**、**観点２**の評価が優れていると認められる者	出願時に提出する調査書における３年次の**評定合計が３２以上**の者で、次の**観点１**の評価が十分であると認められる者

観点１	「他者の意見や他者から求められている事」及び「与えられた課題」に対して、自分の考えを表現することができる。
観点２	他者と協働し、主体的に課題解決に取り組むことができる。

◆ **検査内容について** ＜未来共創科・情報ビジネス科共通＞

選抜方法	コミュニケーション重視型選抜	評定重視型選抜
検査内容	１グループ５名程度で次の①～③を実施 ①**【グループワーク】** 与えられた課題に対してグループで協働して取り組む ※課題解決の過程を重視して評価する ②**【グループワークの振り返り】** 実施した「グループワーク」を振り返る ③**【グループ面接】** 上記①や②に関わる質問に答える ※①～③を１時間程度で実施予定 （志願者数により変更することも考えられる）	１グループ５名程度で実施 **【グループ面接】** 志願理由等、本校のアドミッションポリシーに合致しているかを問う質問に答える ※１グループ 15 分程度で実施予定 （志願者数により変更することも考えられる）

選考方法の検討に当たっては、カリキュラム等ＣＮ（北九州市立大学地域創生学群の廣川准教授）にもアドバイスをいただきながら、大学入試での取組なども参考にして検討した。

実際に志願者役と評価者役で分かれ、志願者がどのように課題に取り組むようにするか、評価者がどのような場面を見て評価するかなど、ワークも重ねながら検討した。

初めて取り入れた選抜方法であったが、志願動機を自分の言葉に置き換えて説明したり、突如投げかけられた質問にも自分なりの解釈で臨機応変に対応する生徒が多数いたことが大変印象的であり、生徒たちから「絶対にこの学校で学びたい！」「市高でなければならない！」といった強い意思を感じ取ることができた。

ウ　志願倍率の変化

また、入学者選抜（特色化選抜）において、志願状況ベースでは、令和５年度の普通科では0.72倍であったが、令和６年度に再編する「未来共創科」の倍率は2.32倍であった。これも、教職員が広報の仕方や丁寧な説明に努めるなどの類まれなる努力の成果であると考えている。

寄せられた期待を裏切らないための授業改善に努めるとともに、引き続き産・官・学・民との連携・協働体制を密にして、社会からの要請に応じた教育課程を充実させていくことができるよう、教育委員会としても万全を期してまいりたい。

エ　合格内定者・合格者を集めた「ファーストコンタクト」を実施

２月17日（土）に九州工業大学内のGYMLABOで、特色化選抜入学内定者及び推薦入学者選抜入学内定者を集めたプレ入学体験会「ファーストコンタクト」を開催した。出身中学校が異なる中学３年生160名が一堂に会した一大行事であった。

これから学び合う仲間と出会い、この仲間と共に課題を解決したり、新たな学校文化を創ったりする気持ちを高め、わくわくした気持ちで入学の日を迎えられることを目指して開催した。

第１ミッション：アイスブレイク

シン・トモダチ補完計画「できるだけ多くのトモダチとハイタッチ自己紹介をせよ！」

第２ミッション：チームビルディング

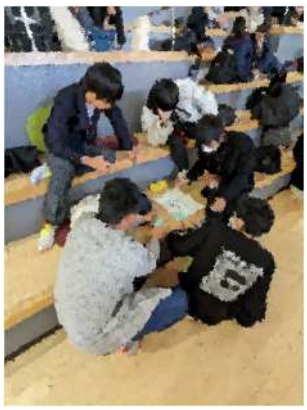
「逃げちゃ、ダメだ。共通点を発見し、チームを結成せよ！」

第３ミッション：グループワーク

「マスダ作戦、開始。～もっとも高いペーパータワーをつくれ！～」

第４ミッション：グループワーク

思考覚悟「自分たちのシン・イチリツをどうしたいか考えよ。」



軽食を食べながらのトークタイム

この取組は初めての試みであり、ゼロベースから計画・立案する必要があったことから、準備に関わった教職員にとっては少なからず負担を伴うものではあったが、実施前後の生徒の変容や寄せられた感想などを見て「取り組んでよかった」との声が上がっており、教職員にとっても学びや実りが多い取組になったようである。

自己紹介（アイスブレイク）やチームビルディング、自分たちの学校をどうしたいか（ワークショップ形式で実施）などの取組を通して、個性や考え方が違う者同士が出会い、互いに１つの目標に向けて取り組むよさを感じられる一日になったのではないかと考える。

この日は、初対面かつ数時間の取組であったため、本当の意味での「仲間」にはなっていない。また、開始直後はグループにあまり溶け込めない、または溶け込もうとしない生徒も見受けられたが、ワークが進むにつれ、徐々に溶け込むタイミングを見つけることができた生徒や、ほかの生徒にタイミングよく声をかけて輪に入りやすい雰囲気を作ってくれたグループなど、様々な変化が見られた。生徒同士が力を合わせて、試行錯誤しながら良好な関係を築こうとする様子が多く見られたのは大変心強かった。

大人（教職員）が、よかれと思って介入して「〇〇しよう」など声をかけると、生徒にとっては「大人からさせられた感・させられる感」が増すことになり、溶け込むことができない生徒にとっては自己肯定感の喪失やその場に居づらくなったりすることなどが考えられる。

今回の取組を通じて教職員間で再度認識したのは、学校で取り組むすべての活動において、「主役は生徒」であることと、教職員がやるべきことは生徒の一挙手一投足にいちいち口を出したり、手取り足取り教えたりすることではなくて、「生徒が主体的に行動する」ための支援、すなわち「コーチング力の向上」「『教える』『導く』からの脱却」であり、教職員たちにとって極めて有意義な行事であったとも感じている。

（７）令和６年度からのカリキュラム案

ア「カリキュラム検討委員会」

（ア）カリキュラムの試行実施・改善

校長、副校長、教頭、教職員３名から構成される「カリキュラム検討委員会」を校内に設けている。会議の際には、カリキュラム等ＣＮ及び大学生にも参加してもらい、令和６年度からのカリキュラムの検討を行った。

令和４年度に策定したカリキュラム案を出発点として、令和５年度は１年生を対象として試行の実施を重ね、随時、教育内容の質的向上を目指した改善を行った。

しかし、令和６年度から本格実施予定の学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」は、現行の１年生の教育課程には設定されていないため、「総合的な探究の時間」内での試行実施となった。「総合的な探究の時間」については、各学年１単位時間のみの設定となっているため、試行実施する内容は令和６年度に実施するカリキュラムの一部の実施に留まった。

令和４年度時点で、現行の１年生の教育課程に学校設定教科として組み込んでおくことも不可能ではなかったため、試行実施時間を十分に確保できなかったことについては猛省している。

しかし、一部のカリキュラムを一部の生徒に限定して試行実施する試みも併せて実施するなど、できる限り工夫しながら試行実施時間を確保し、改善に努めてきた。

（イ）新たな学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」に係る単位数の再検討

令和４年度当初に検討していたカリキュラム案では、各学年を通じて１単位時間の割当てとすることを想定していた。

しかし、令和４年度末に実施した「北九州市立高等学校の魅力向上にかかるアンケート調査」の結果を踏まえ、充実した探究学習の実現、学びの質の向上及び生徒たちの能力開発に当たり、各学年１単位時間では足りないと判断し、各学年に２単位時間を配分することに決定した。

この単位数の再検討に当たっては、本校全体の教育課程に直結し、教科間の単位数の調整などが必要で、一筋縄ではいかなかったが、探究的な学びの充実という目標に向けて対話を繰り返し、思いを共有して、何とか推し進めることができた。

（ウ）定期的なカリキュラム検討

カリキュラムの検討に際しては、時間割内に検討会議の時間を設けることで、定期的にカリキュラム検討に努めることができた。特に今年度は、令和６年度に向けて、新しく設定する学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」の試行実施をしていることから、事前打合せの時間としても活用した。

さらに、「イチリツ・プロジェクト」を試行実施している学年との打合せ時間も設定し、必要に応じて随時打合せを実施することができた。

（エ）コーディネーター（ＣＮ）及び外部有識者等との連携強化

カリキュラム検討に当たっては、校内での検討のほか、北九州市立大学 地域創生学群の准教授である廣川カリキュラム等ＣＮや、コンソーシアムの構成員等とも協議し、学習内容の連携と深化に向けた検討を重ねることにより、生徒たちがより実践的なスキルを習得するための土台を整えることができたと考えている。

廣川ＣＮの専門的知見（持続可能な地域づくり、地域資源管理論など）や、地域創生学群での学びのカリキュラム作りのご経験等を反映させることで、教育プログラムの質的向上につなげることができた。また、校内でのカリキュラム検討の状況・内容等について廣川ＣＮに適宜ご相談することにより、カリキュラムの目標設定、学びを行う上で必要となる知識や技能などについてご助言いただくことができた。

また、カリキュラムの開発過程において、教育委員会、大学、コンソーシアム構成員、様々な企業とも積極的に意見交換することで、社会や時代からの要請に対応した教育内容となるように努めた。

１月 30 日に開催した第４回目のコンソーシアムでは、構成員に総探の時間に実施している「イチリツ・プロジェクト」の授業と、生徒たちが学ぶ様子も参観いただいた。より良い学びにつなげるための具体的な助言もいただくこともでき、カリキュラム内容の見直し・改善につながった。

（オ）学生インターンと協働したカリキュラム検討

令和５年度から、北九州市立大学から長期インターンシップ生（１名）を受け入れている。学生インターンは同大学の地域創生学群の学生で、廣川ＣＮのゼミ生でもあるため、ゼミで地域社会課題を解決するための学びを日常的に体験している強みがある。

そのため、新しいカリキュラムのプログラムに係るワークシートやプレゼンの作成の支援、探究的な学びを実践する生徒への支援（伴走）を担ってもらうことにした。

「顧客」である学生としての立場からの意見をもらうことで、本校教職員が地域課題の解決や探究的な学びづくりを実践する際に必要な視点・考え方、手順などを改めて考え、振り返ることができたとともに、また新たな気づき・発見などにもつながった。

（カ）先進事例の視察とその活用

先進的・革新的な教育プログラムを導入している他校の視察も実施した。

これまでは、従来から培ってきた教育活動の経験に加えて、書籍やインターネットから得た情報、廣川ＣＮ等の外部有識者からの情報・助言などを基に、カリキュラム内容等を検討していた。しかし、それらはあくまで二次的な情報に過ぎず、実際に目にした情報ではないため、心もとなく感じることも少なくなった。

そのため、令和５年度は、実際に学びの様子を拝見したり、他校のカリキュラム検討の担当教員等との意見交換をしたりする機会を積極的に設定した。

視察を通じて得た知見は、教員間でも共有して、カリキュラム開発に当たっての新たな視点・考えの獲得にもつながった。

カリキュラム作りに関する情報だけではなく、生徒の探究的な学びの伴走の仕方、現在抱えている課題、その課題解決に向けた取組なども併せて知ることができた。視察校とのつながりもでき、その後の情報交換等も継続的に行うことができ、カリキュラム検討以上に得られたものも大きかった。

（キ）探究的な学びづくりのための教職員の実践

カリキュラムの検討だけでなく、教員が探究的な学びを実践していく上で必要な支援の在り方や研究も必要と考えた。

そのため、現行の１年生で試行実施している「イチリツ・プロジェクト」の状況や、その授業に１年生の教員が実際に参加してみて感じたことなどを基に教職員研修を実施し、教員の伴走の在り方などについても意見交換して、「チョークアンドトーク」ではい対話型授業の大切さやファシリテーションのポイントなども踏まえて自分たちの授業の在り方を見直すきっかけとしてもらうことにした。

また、令和５年度から配置している探究学習支援ＣＮである大庭ＣＮ（西南女学院大学非常勤講師）にも授業を見ていただき、授業改善に必要なポイントなどについてもご教示いただくことができた。

（ク）客観的評価に基づくカリキュラム改善

令和４年度から「高校魅力化評価システム」を活用している。学校としてターゲットとするべき指標を見定めることや、学年ごと、個人ごとの状況や伸びなどを把握することにも役立っている。

この２年間で、「学習活動面」の充実については大きな伸びが確認できたが、それ以外の３項目「自己認識」「行動」「ウェルビーイング」については、10 ポイント以上の伸びがほとんど確認できなかった。

つまり、「学習活動」の環境づくりは顕著な改善ができていると考えるが、その環境づくりや、実際に生徒の意識を変えたり、行動を変えたりするところまでは到達できていないということが明確となった。

そのため、令和６年度以降は、生徒が実際に動いて、学ぶ楽しさを実感できる学習活動づくりに重点を置き、本校全体の底上げにつなげていきたい。

また、令和５年度には、探究学習に係る資質・能力を数値化して評価するシステム「ＡｉＧｒｏｗ」を利用した。この評価については、自己評価に加え、３名の他者生徒からの評価も加えたものが数値化されるため、より客観的な評価が期待できる。

令和５年度は、試行実施として、年２回（１学期・３学期）のアンケートを実施

し、評価の伸び率を比較することにより、カリキュラム改善の視点を客観的に捉え、活用することとしている。

※カリキュラム検討会の様子

3 令和6年度の展望

＜学校設定教科　「イチリツ・プロジェクト」の学びの充実に向けて＞

令和６年度は、いよいよ新しい学校設定教科である地域課題の解決に向けた体験的な学び「イチリツ・プロジェクト」（以下「イチプロ」という。）がスタートする。

「イチプロ」では、「主体性」「多様性」「協働性」を育てることに軸を置いて取り組む予定であるが、一方通行で教員が生徒に教えるといった、座学中心の授業ではなく、様々な方々との対話を通じて発見した社会課題などを題材とした、生徒参加型の授業を実施していく。

外部人材を講師として活用したり、学校外でのフィールドワークを取り入れたり、大学と連携した授業の実施なども予定している。

学校・地域（地元）・北九州市の未来を「探究学習のテーマ」として設定し、異なる学校種（大学など）、市役所・区役所、市民・自治会・市民センター・商店街、企業・ＳＤＧｓステーションなどと連携・対話しながら、社会課題などに対する改善策を協働して検討していくプログラムを実施する。

「イチプロ」のカリキュラム作成に係る作業自体は完了しているが、随時、生徒の学びの進捗状況に応じた修正・改善をＰＤＣＡサイクルで回していく予定である。

「イチプロ」には、北九州市立大学　地域創生学群の学生の皆さんにも学習支援（伴走）していただくとともに、隔週で実施予定の定例会にも参加いただき、教職員とともに振り返りを行い、意見をもらうことにしている。生徒の成長度合いを客観的に数値化できる評価手法の検討なども併せて実施していく。

「イチプロ」については、テーマや学習内容などを教職員やカリキュラム等ＣＮなどの大人だけで作るのではなく、生徒の中から「学びの運営リーダー」や「地域課題解決に向けたプロジェクトリーダー」を選出して参加させるなど、生徒の意見も大切にしながら学習環境の改善やテーマ設定に生かしていきたい。

社会が変われば、必然的に学びも変わることになるので、学校内部での議論に満足するの

ではなく、コンソーシアムや運営指導委員会、学校運営協議会の議題としても取り上げて、様々な分野や立場からの意見をいただきながら、常に学びのアップデートを図っていく。

＜高校魅力化システムについて＞

定点観測（２学期に実施）を行い、経年比較していきたいと考えている。

また、令和５年度は実施できなかったが、カリキュラム等ＣＮや授業支援に携わった大学生などにも教員用アンケートに回答していただき、様々な視点からの分析を行い、改善につなげたい。そのためには、評価結果を教職員研修などにも活用して、全員で考えて改善するための材料としたい。

生徒の探究的な学びに係る資質・能力の評価についても丁寧に分析を行い、原因と結果の関係性を視覚化して、「数字が上がってよかったね」だけで満足して、それで終わることがないように、一貫性のある取組に生かしていく。

ONew
KITAKYUSHU City
High school

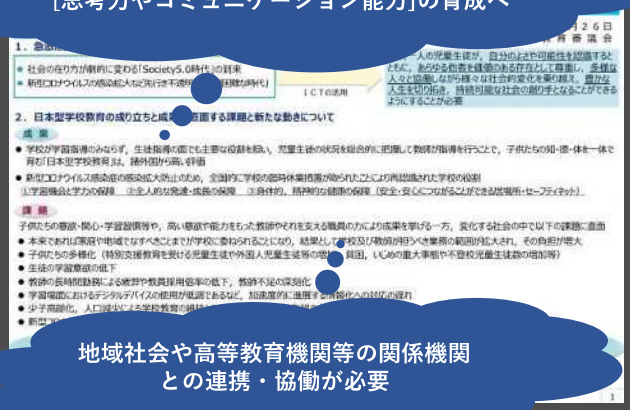
◆AGENDA（目次）

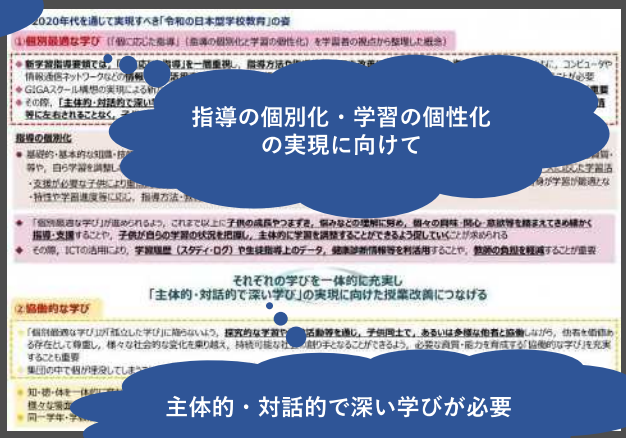
本日のナイトスクールについて

1. シン・イチリツ。今後の方向性について
   校長　増田　順
2. 変化する「学力」の考え方と「大学入試」について。
   北九州市立大学　地域創生学群　准教授　廣川祐司
3. シン・イチリツの学びについて
   普通科主任　吉岡　正俊
4. 質疑応答

令和の日本型学校教育を目指して　（中央教育審議会）

コンテンツベース（知識の習得から）から
コンピテンシーベース（知識を使う能力）
[思考力やコミュニケーション能力]の育成へ





指導の個別化・学習の個性化
の実現に向けて

地域社会や高等教育機関等の関係機関
との連携・協働が必要

主体的・対話的で深い学びが必要

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科…

普通科改革！

背景・課題

○ 高等学校には多様な背景を持つ生徒が在籍していることから、義務教育段階において育成された資質・能力を更に発展させながら、**生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に応じた学びを実現する**ことが必要。

○ 令和３年１月の中央教育審議会答申等においては、**高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための教育**が必要とされた。

○ 文部科学省においては、令和３年３月３１日の省令改正により、「普通教育を主とする学科」として「学際領域に関する学科」や「地域社会に関する学科」等の**普通科以外の学科を設置可能**とした。

事業内容：普通科改革の実現に資する先進的な取組に係る調査研究

①特色・魅力あるカリキュラム及び教育方法の開発

⇒学際領域学科又は地域社会学科を設置するために必要な、特色・魅力あるカリキュラム及び教育方法を開発することにより、革新的な教育活動を実践し、その検証を行うこと。（令和６年度又は令和７年度の学科設置に向けた検討を行う高等学校等においては、カリキュラム及び教育方法の開発により革新的な教育の実現を目指すこと。）

※そのカリキュラム及び教育方法が全国的に見て先進的であり、他の高等学校における普通科改革のモデルとなるものであること。

②関係機関等との連携協力体制の整備、連携協力を担うコーディネーターの配置

⇒コンソーシアムを置く等、学際領域学科は、大学等、国の機関又は国際機関その他国際的な活動を行う国内外の機関等との連携協力体制を、地域社会学科においては、地域の行政機関又は事業者その他地域の活性化に資する活動を行う機関等との連携協力体制を整備すること。また、その連携協力が円滑に行われるよう、連絡調整を担うコーディネーターを配置すること。

ReseEd

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）指定校一覧

管理機関	指定校	教育課程の特色
和歌山県教育委員会	串本古座高等学校	地域の多様な教育資源を活用した「宇宙探究コース」「地域探究コース」の設置を通したSociety5.0を生き抜くために必要な能力の育成
和歌山県教育委員会	新宮高等学校	熊野の地「熊野」にかかわる学際的な学びによる、気づきや問いに誠実に向き合う広く深い学びの実現
島根県教育委員会	隠岐島前高等学校	離島発「グローカル人材」育成のための「教科・探究学習が有機的に融合したカリキュラム」
愛媛県教育委員会	三崎高等学校	地域社会学を教育課程に位置づけたSTEAM教育・キャリア教育の推進等による「みさこうSTEAM教育」の実現
高知県教育委員会	清水高等学校	ジョン万次郎の生涯を紐解き、現代社会の諸相についてSDGsの視点から考察することを通して、「21世紀のジョン万次郎」を育成
福岡県教育委員会	八幡高等学校	学校設定教科「知の統合」による教科科目横断型授業と総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」との往還
北九州市教育委員会	北九州市立高等学校	SDGsの視点から社会課題を捉え、探究活動と「産・官・学・民」の連携により社会変革とビジネスの一致を目指し、未来の社会をけん引する力を育成
長崎県教育委員会	松浦高等学校	「松高キャリア・プランニング」や「まつナビ・プロジェクト」（地域課題解決型学習）における探究活動等による、地域社会の未来を担うリーダーの育成
宮崎県教育委員会	飯野高等学校	学校設定科目「グローカル共創探究」による地域をフィールドとした探究活動や「超探究の日」等による、次世代に必要な力を地域と共育する学び

令和4年度　全国で20校が
採択決定！

先行研究における「意識・行動面を含めた仕事に必要な能力等」は、56項目から成る人の能力等の全体が整理されたものである。

意識、行動面	ビジネス力	スキル	知識
意欲・積極性	情報収集	基盤スキル	科学・技術
自発性	状況変化の把握	学習スキル	化学・生物学
ねばり強さ	的確な予測	数理スキル	芸術・人文
向上心・探究心	的確な決定	言語スキル：文章	医療・保健
責任感・まじめさ	問題発見力	言語スキル：口頭	ビジネス・経営
信頼感・誠実さ	ビジネス創造	テクニカルスキル	外国語
人に好かれること	革新性	ヒューマンスキル	土木・建築
リーダーシップ	戦略性	コンピュータスキル	警備・保安
協調性	客観視	モノ等管理スキル	
柔軟性	説明力	資金管理スキル	
注意深さ・ミスがないこと	交渉力	段取りのスキル	
スピード			
社会常識・マナー			
身だしなみ・清潔感			
体力・スタミナ			
ストレス耐性			
社会人、職業人としての自覚			
現在の職業に特有の態度・行動			

基礎的機能	その他
基本機能	仕事に関係する人脈
知的機能	資金力
感覚機能	仕事に関係する免許・資格
運動機能	現在の仕事に特有な知識や経験

（出所）独立行政法人労働政策研究・研修機構「職務構造に関する研究Ⅱ」を基に経済産業省が作成。

18

仕事に必要
とされる能力
［５６項目］

５６の能力等に対する需要の変化

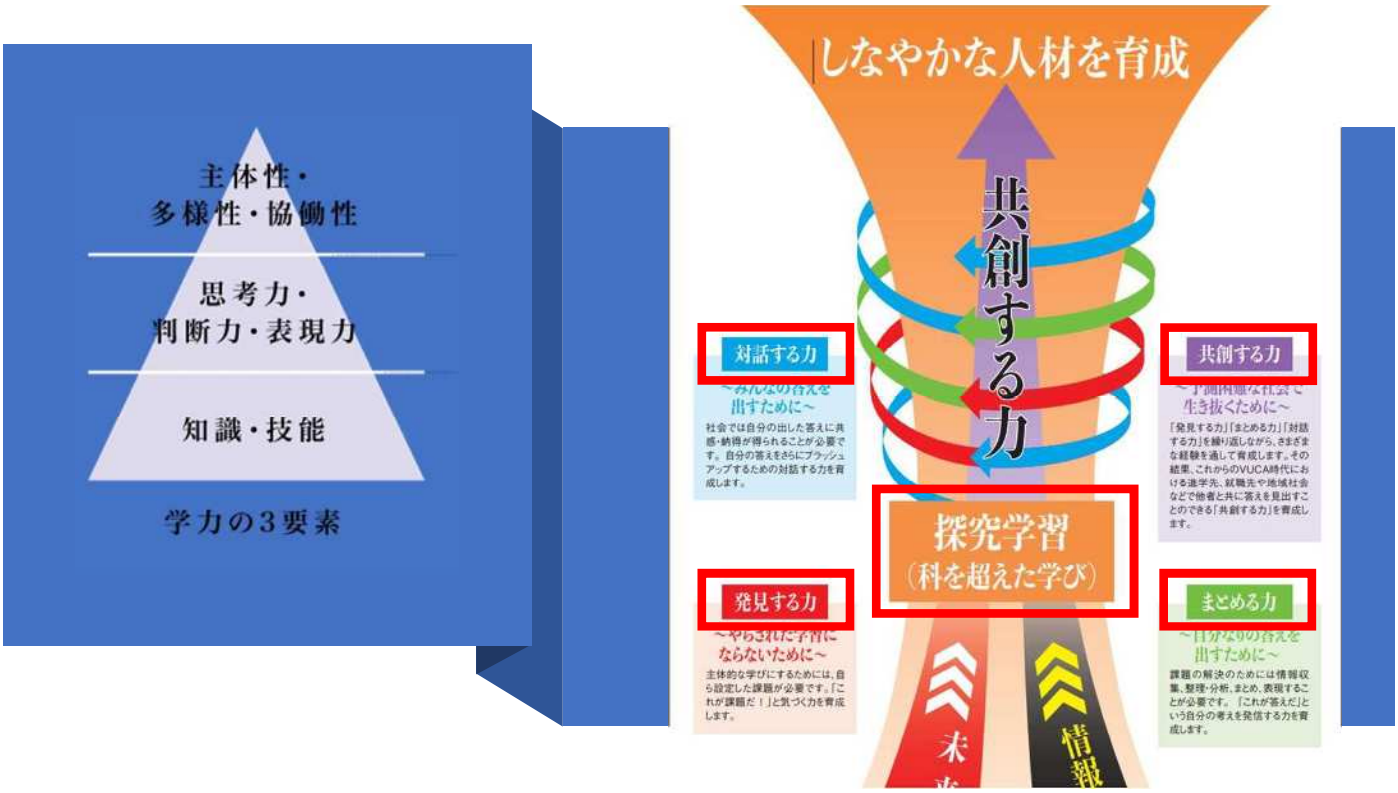
2015年	
注意深さ・ミスがないこと	1.14
責任感・まじめさ	1.13
信頼感・誠実さ	1.12
基本機能（読み、書き、計算、等）	1.11
スピード	1.10
柔軟性	1.10
社会常識・マナー	1.10
粘り強さ	1.09
基盤スキル※	1.09
意欲積極性	1.09
⋮	⋮

2050年	
問題発見力	1.52
的確な予測	1.25
革新性※	1.19
的確な決定	1.12
情報収集	1.11
客観視	1.11
コンピュータスキル	1.09
言語スキル：口頭	1.08
科学・技術	1.07
柔軟性	1.07
⋮	⋮

北九州市立高等学校の魅力向上にかかるアンケート調査結果（抜粋）

質問：「これからどのような「学び」や「力」が必要になると思いますか？」

	①中学生	②保護者	③高校生	④大学等	⑤企業等
1	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力・協調性	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力・協調性	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力・協調性	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力
2	基礎・基本の学力（18.9%）	まとめ・発信力	基礎・基本の学力（13.0%）	課題発見・解決	課題発見・解決
3	情報処理・活用	情報処理・活用	情報処理・活用	まとめ・発信力	まとめ・発信力
4	問題発見・解決	問題発見・解決	問題発見・解決	論理的思考	基礎・基本の学力
5	まとめ・発信力	基礎・基本の学力	まとめ・発信力	基礎・基本の学力	協調性・社交性
	（1641人）	（589人）	（359人）	（20校）	（133社）


主体性・
多様性・協働性
思考力・
判断力・表現力
知識・技能
学力の3要素
しなやかな人材を育成
共創する力
対話する力
社会では自分の出した答えに共感・納得が得られることが必要です。自分の答えをさらにブラッシュアップするための対話する力を育成します。
共創する力
「発見する力」「まとめる力」「対話する力」を繰り返しながら、さまざまな経験を通して育成します。その結果、これからのVUCA時代における進学先、就職先や地域社会などで他者と共に答えを見出すことのできる「共創する力」を育成します。
探究学習
（科を超えた学び）
発見する力
主体的な学びにするためには、自ら設定した課題が必要です。「これが課題だ！」と気づく力を育成します。
まとめる力
課題の解決のためには情報収集、整理・分析、まとめ、表現することが必要です。「これが答えだ」という自分の考えを発信する力を育成します。
情報

日本の学生は、「大学生後期」に進路を決める者の割合が高い。

（出所）リクルートワークス総研「Global Career Survey」を基に経済産業省が作成。

60

ONew
KITAKYUSHU City
High school

多彩な大人や社会との接点による学び！

多くの体験を通しての学び！

なりたい自分に出会う場所

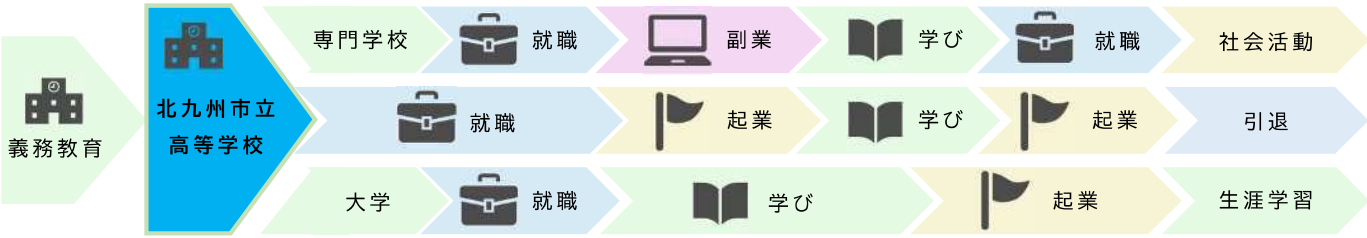
他のどの高校よりも圧倒的に
「多様な学びの機会」を提供する。

他のどの高校よりも圧倒的に
「個々に対応した成長のサポート」を提供する。

ONew
KITAKYUSHU City
High school

従来のライフスタイル

これからのマルチステージ



新しいコミュニティに飛び込む勇気 / 学び続ける態度・姿勢

ON
KITAKYUSHU City
High school

New

KITAKYUSHU City

High school

2023年8月24日（木）＠ウェルとばた
北九州市立高校　ナイトスクール

「これからの求められる力と大学入試の変化について」

＜担当＞
北九州市立大学　地域創生学群
准教授　廣川祐司

北九州市立大学
入試広報センター　委員
→入試制度改革・高大接続改革

北九州市立大学
教育改革推進室　室員
→教育の質改革、評価、カリキュラム作り

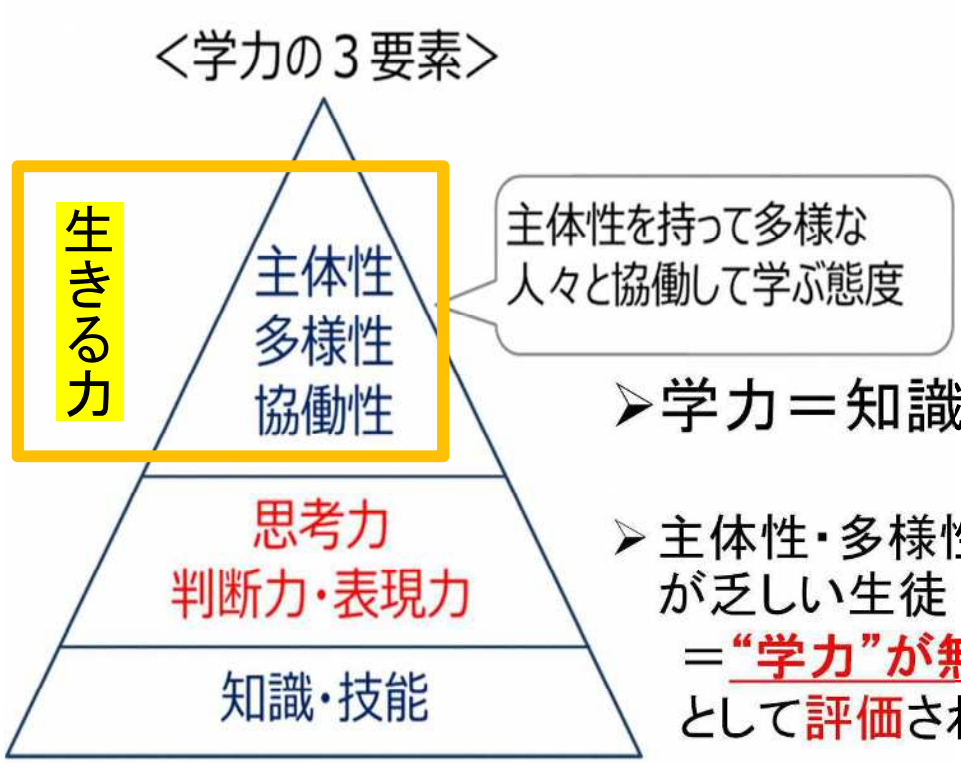
＜保護者の皆さんにお伝えしたい事＞

①**“学力”**という考え方が変化しています。

②「大学**入試制度改革**（高大接続）」が
急速にすすんでいます。

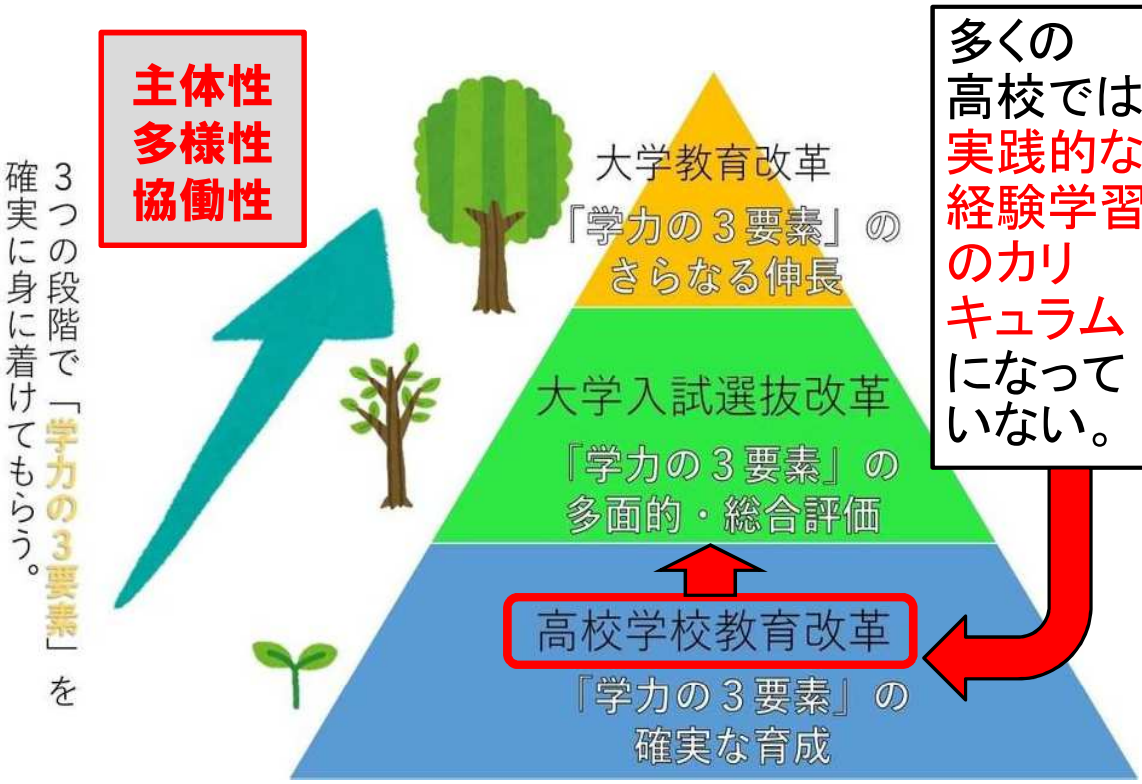
③ **能力が**可視化され、**点数化する**ことが、
可能になっています。

①“学力”という考え方が変化しています。



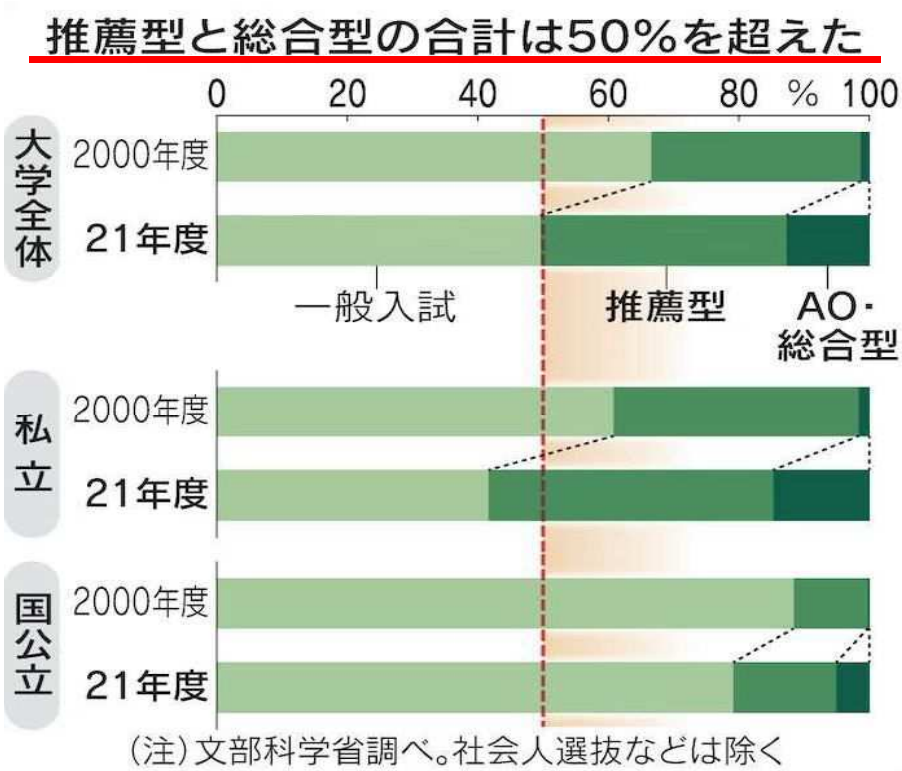
- 学力＝知識量：×
- 主体性・多様性・協働性が乏しい生徒
＝**“学力”が無い生徒**として**評価**されてしまう。

①“学力”という考え方が変化しています。



多くの高校では**実践的な経験学習のカリキュラム**になっていない。

② 大学入試制度改革が進んでいます。



日本経済新聞（2022年8月15日付）
「大学入試、偏差値時代終幕の足音　推薦・総合型が過半に」

② 大学入試制度改革が進んでいます。

大学入試のあり方に関する検討会議
提言（令和3年7月8日）（抄）

【第5章　ウィズコロナ・ポストコロナ時代の大学入試選抜】

（3）大学入学者選抜等の改善に係る好事例の公表及びインセンティブの付与

- 上記の好事例の認定も適切に活用しつつ、インセンティブの付与を検討すべきである。例えば、国立大学については、第4期中期目標期間における国立大学法人運営費交付金の在り方についての検討状況も踏まえ、優れた取組も促進・評価することができるよう検討するべきである。私立大学については、私学助成のうち、特色ある取組や大学改革を推進する支援スキームを活用し、評価項目の見直し等により、他の模範となる優れた取組を促進することを検討すべきである。また、公立大学については、好事例の認定結果を設置者や設立団体に対し、法人（大学）評価や資源配分の参考に活用することができる旨通知することを検討すべきである

私立大学だけでなく、全国の国公立大学も、「主体性・多様性・協働性」を測る
【特色ある大学入試】へ改革が進んでいる

② 大学入試制度改革が進んでいます。

③ 能力が点数化することが可能に！

➢一昔前までは、非認知能力は、「数値で表すことができない力」と言われてきたが・・・

認知能力
点数などで数値化できる能力

- ペーパーテストの結果
- IQの値
- 語学力
- 専門性、専門知識　など

非認知能力
数値で表すことができない力

- 自分を高めようとする力
- 周りの人とうまくやっていく力
- 自分の感情をコントロールする力

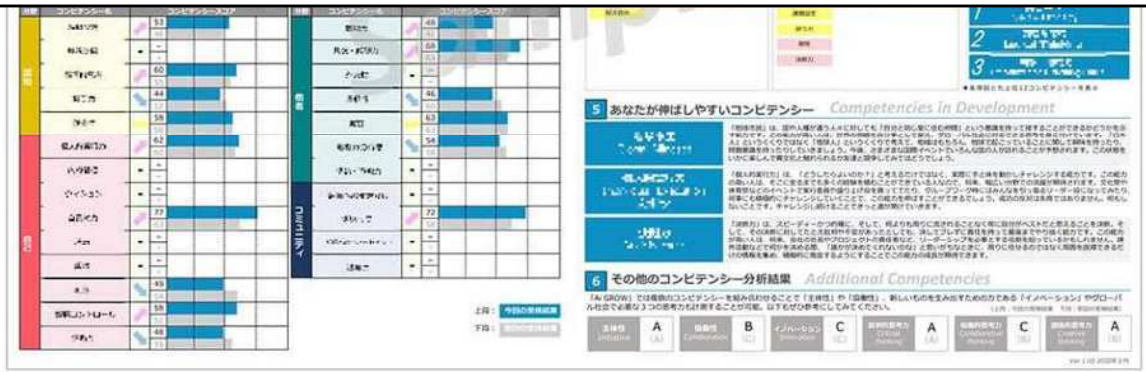
など

主体性
多様性
協働性

③ 能力が点数化することが可能に！

【サンプル】「Ai GROW」個人レポート（1枚目、表面）

Ai GROW ：思考・表現・判断力や主体性などを、AIを活用して客観的に可視化する評価ツール（市高採用）



（株）ベネッセ　i―キャリアが開発した
GPS-Academic　（北九大で採用）

	測定項目		受検時間	新・社会人基礎力	学力の3要素
思考力	批判的思考力	・情報を抽出し吟味する ・論理的に組み立てて表現する※1	※2 記述無し 約45分	考え抜く力 （シンキング）	思考力 判断力 表現力
	協働的思考力	・他者との共通点・違いを理解する ・社会に参画し人と関わる※1			
	創造的思考力	・情報を関連づける・類推する ・問題をみいだし解決策を生み出す※1			
姿勢・態度	レジリエンス	・感情の制御 ・立ち直りの速さ ・状況に応じ冷静に対応する	約10分	チームで働く力 （チームワーク）	主体性を持って 多様な人々と協 働して学ぶ態度
	リーダーシップ	・自ら先頭に立って進める ・未知の物に挑戦する ・粘り強くやり抜く			
	コラボレーション	・相手の立場に立とうとする ・他者と関わろうとする積極性			
経験	自己管理	・挑戦する経験 ・続ける経験 ・ストレスに対処する経験	約5分	前に踏み出す （アクション）	主体性を持って 多様な人々と協 働して学ぶ態度
	対人関係	・多様性を受容する経験 ・議論する経験 ・関係性を築く経験			
	計画・実行	・解決策を立案する経験 ・課題を設定する経験 ・実行・検証する経験			
学生意識	新入生or在学生用	・大学教育への期待と評価 ・学習行動と今後の取り組み ・大学への適応 ・進路への意識と行動	約20分	何を学ぶか どのように学ぶか どう活躍するか	

大学でも測られる

企業が求める人材像、
「意欲的」で「コミュニケーション能力」がある人材

求める人材像 ～ 従業員数別、上位 5 項目　（複数回答、3 つまで）(%)

	1,000人超		1,000人～301人		300人～ 101人	
1	コミュニケーション能力が高い	50.0	コミュニケーション能力が高い	53.2	コミュニケーション能力が高い	46.6
2	意欲的である	38.6	意欲的である	43.1	意欲的である	45.1
3	創造性がある	24.3	主体性がある	18.2	素直である	21.4
4	主体性がある	21.4	創造性がある	15.6	専門的なスキルを持っている	17.6
5	問題意識が高い	17.1	専門的なスキルを持っている	14.6	真面目、または誠実な人柄である	16.6

	100人～51人		50人～ 21人		20人～6人	
1	意欲的である	44.7	意欲的である	44.0	意欲的である	44.5
2	コミュニケーション能力が高い	43.3	コミュニケーション能力が高い	41.1	コミュニケーション能力が高い	38.1
3	素直である	24	素直である	28.7	素直である	27.8
4	専門的なスキルを持っている	18.2	真面目、または誠実な人柄である	19.4	真面目、または誠実な人柄である	22.5
5	真面目、または誠実な人柄である	17.7	専門的なスキルを持っている	16.5	専門的なスキルを持っている	18.7

出典／株式会社帝国データバンク
「新型コロナウイルス感染症に対する企業の意識調査（2020 年 10 月）」より

＜総合型選抜や学校推薦型選抜は、特色入試多い＞

・グループディスカッション
（集団討論）

・進学後の将来ビジョン

・プレゼンテーション
（研究計画）

・高校時代の
探究学習の成果
など

北海道新聞掲載
（2023年6月5月付共同通信配信）

学びeye

道新デジタルの教育コーナー

早期に学生確保　早く合格したい

大学入試「総合型」が拡大

22年度、一般選抜は半数以下に

決断力や創造性 可視化
AI診断 中高で活用

最後に・・・

地域実践 ～ していると、
勉強している ～ 十分とれず、
学力 ～ まう！
（特に進学校 ～ 先生 ～ に多い考え方）

北九州市唯一の市立高校だからこそできる、
行政との連携、地域課題への深い関わり

民間出身校長だからこそできる、
企業との太いパイプを活かした実践教育

3年間を通して、住民・行政・企業・大学と一緒になって、汗をかきながら学ぶ新カリキュラム始動

伝統に慢心せず、新たな時代の最先端教育に舵を切る「シン・イチリツ」にご期待下さい